

北條時頼記

○第壹

作者 西澤一風

並木宗助

葵の花の日を見て轉じ芭蕉の雷を開て開き耳目なうして時を知る況
や明君機よ臨み變よ應じて民を撫艱苦を憐み世を富す惠みめぐれる
國人の相摸守時頼朝臣古今よ厚き仁徳の築へ茂びて桑の門薙髪の遺
を尋るよ建長かぞへて四つの年卯の花月の都より後嵯峨の院第一の
皇子宗尊親王と聞へしれ鎌倉の御所よ入御なつて前の將軍の後代嗣
と各かしづき奉る親王は年十三歳才智賢く渡らせ賜へば執權北條相
模守時頼同若狭の前司泰村は藏の典鑰佐野の兵衛政經其外在鎌倉の
諸大名善盡し美盡しては家督相續とぶきて天下の悦び餘り有宗尊親
王は袖を引つくろひ某いまだ幼稚なれ共將軍職を賜ふ逆大裡の飛脚
先達て是を告今日都より三浦彈正の忠吉村が將軍職の除書を持參し

たる由、二階堂信濃之助出向ふ、將軍職の尤重く、武畧の器量あらざれば、其任よあたらずと父上皇の教給ふり、時頼泰村兩執權よまかせよとの事、何事も兩人を一入頼むとの給へば、時頼頭をかたふけ給ひ、恐れ多く憚りながら發明成る詞、誠よ前の將軍頼嗣卿、文武の道ようとく酒宴好色よまとひせ給ひ、かくてひいかゞ有べしと密よ奏問致す所、頼嗣卿を召かへされ、宗尊公の下向へ暗夜え灯得たるがごとく某の不肖の身、若狭の前司泰村も、同じく執事よ候へん治世の万歳と、聞より前司泰村は、強欲不敵の者あれども、さあらぬ体よ膝立直し、時頼殿いたみ入たる一言、凡鎌倉將軍職、頼朝卿三代の源家、頼經卿二代の藤原氏、今我君の上皇第一の皇子、六代三家よかれ共、執權職の時政より今邊よ至るまで、既よ五代の北條家嫡よ相續召るゝ上、邊よ男子なき事を帝獻聞ましくて、官女の内月小夜とア美女を給へり、二階堂信濃之介

是を守護して御用を兼る、猶又二階堂が娘玉豊姫も同じく美人の聞へ
有由、閨の伽々下されてそれ成兵衛が弟、佐野源藤太經景が属隨ふ、何れ
成共先々懷胎の方本妻たりとの宣言なり、かくまで覺目出度家、執權へ
北條殿と門前々市をなす、一人よても事たるべけれど、故北條義時卒去
の後、時房泰時兩執權の古例を守、共々政務の立ぐるし、諸大名の用ひが
たらぬ、名計の某々兎も角もと捨置て、は邊の利分々政道めされど、仁
義々築へる時頼をそねむ詞のはりふくむ折もこそあれ都の使、三浦彈
正の忠吉村鶴が岡より參上すれば、出向ひたる二階堂信濃之介道秀、少
こなたよ畏る彈正吉村謹で、宗尊親王の由所上皇の皇子みて渡らせ給
ひ、は母ハ勘解由の次官棟基の娘棟子、親王の將軍元祖と名籍よ至
る迄、正親の正筆を執ておもく記録よどいめらる、又征夷大將軍の除書、
建久の例よまさせ、鶴が岡八幡宮の神前よて、は迎ひの二階堂信濃之介

よ渡し侍ふに昇進くと、二聲高く二階堂落様通りよ罷出除書のに箱持參れば、時頼受取うやく敷宗尊親王み奉る、則上覽ましくて、右
よ置給ふを泰村頼てに納戸がまへよ納れば、彈正を始諸大名、各是を賀
し奉り禮義三百威儀三千方三歳と一同に代長久をぞ祝ひける、泰村
に前へ近く寄仰將軍の四方の夷を征する爲、昔より黃金を以て飭れる
斧錦の節をくだし給ふ、頼朝卿のに時より此二色をに藏よ納む、宗尊大
將軍の上覽よ入奉らん、時頼いかみといひけれど、某も左様存づれ、每
年七月七日の虫干よ邊某監改め封印の二階堂錦は是成佐野の兵衛
つかさどり罷在、それくと仰を請兩人に藏よむかひしが、佐野の兵衛
仰天し何者の仕業よや鎖捻切てひどいふより直よ二階堂に藏よ入て
斧を取共よ蒐出大きよさひきに斧よ別義なく、錦のに節見へひはず
と聞よ將軍兩執權に使の彈正吉村に前よ詰し大小名、一一大事を顕見

合せ皆と、驚く計也。時頼子細を以覽あれば、鎮より糖をぬりねばらせ、唐土の盜賊が邪智、爰より用ひし盜賊のよのつねの者ならじ。斧鉄節度の其中より斧の刑戮を専らよし。錦の節の將軍職を万民より示さん爲、此二色を節刀といふ。今ハ夷も治まれば、此斧よりも寶の將軍職の志るしの節、土を穿て詮議せよとの給ふ内より前司泰村^ヤさのみされがれそ。盜人ハ志れて有どり何者ぞ何奴と各眉を顰むれば、以節をよく監て改めし。時頼某^{トシタケル}卦印^{トシタケル}ハ二階堂改めし。共卦印共藏の内みて失たるハ此三人があらぬ事、^ナ兵衛汝^ハ鑰預ながら、^ハ藏の内の^ハ節見へねば、此盜人は汝也、さつと出せどきめ付れば、覺なけれど云譯なく思ひぬ科を老の身のゆるく、齒切^ハ無念なる。二階堂信濃之介眞中より立隔^ハミ^トをやうくしや泰村公^ハ藏の^ハ節佐野之兵衛が盜しならべ、持合せたる^ハ鑰^ハ以て鎖を損ふ迄もなし。是云譯の見へたる事、又盜しの誠あれど、科を他人より

づらん爲態と鑑を用ひずべ、是疑ひのなきよりあらず、かく云譯と疑ひ
といまだ分明ならぬ兵衛、押付て盜人とい、執權職の泰村より少似合ぬ
ほ詮議と、道を立たる理よつめられ、どうで赦さぬ待ておれと咳きてこ
そゐたりける、將軍宗尊きよしめし御聞合きよしめし御今日我將軍となれば、町人百姓も聞傳へ都
よまします父上皇、懸うける悦び有べきよ、此事聞し召れなば思召わづらい
給りん、ア彈正吉村、汝女早く都へ歸り、將軍宣下事ゆへなき由う奏問うそんし錦
の節はない都みやこよても密ひそかニ穿鑿せんぱく致せよと、さとくかしこきほ意を講、誠まことニ梅檀めいたん
れ二葉より芳かなばしさほ詞こと、一イ承知仕る、某彈正の忠ただとして、京中の非
義非禮ひねいを彈うしめぐれる役なれば、都みやこより候共便宜のんぎを窺うかがひ尋たずねべし、早
ほ暇ひまと色代しきだいすれば、兼て心をつうじたる前司泰村送り出、何をか互うがふ玄
らせる目色、よそようつして笑わらひ顔おもて、都みやこの使つかひ歸りけり、時頼諸士よしろしよ打向
ひ、將軍の仰おほといひ、急いそ々此事沙汰さわざあらばかへつて事の破れとならん、先

穩便^{おんびん}詮議^{せんぎ}すべしかたべ此旨守られよ先將軍宗尊公、^ひ寝所^{じゆじょ}渡御^{とぎよ}
然るべしと時頼泰村すゝむる迄^{しあり}裝束^{しゃうぞく}正^{ただ}しくましますいは成人を思ひ
やる時頼兵衛二階堂末頼もしく悦ぶ中、天下を望む悪心有、泰村一人ま
さろしき僕人贅人兩執權、末^{すゑ}は見わくる大將軍、^ひ簾^{れん}入らせ「給ひけ
り佐野の兵衛政^{さや}經^{つね}ハ錦^{にしき}の^は節失たるハ天災^{あまさい}とい云ながら、^ひ藏^かの鑰^かの
預り主特^{とく}々尋^{たず}を云付られ、思案^{ひも}の紐^{ひも}のとく間なく思ひあたりし事有て、
弟佐野の源藤太^{つね}經^{かが}景^{かげ}方^{かた}へ心ざし、夜中^よ通^とる切^き通^つし桐^{きり}が谷まで來りし
が、向ふ^{むか}見ゆるちやうちん^ひ相もからぬ家の定紋^{じやうもん}、^ひ弟源藤太よ
き出合^{きうち}と待^ま請^{うけ}、こなたも思ひず行かしり互^{たが}々近寄兄弟の、兄政經詞^{こと}をか
け、源藤太か珍^{めづら}らしや、夜中^よ何方へ参^{まつ}らるし、夜咄^{よつ}しよなら同道せん誘^ゆ
俄^{いわ}の^{いわ}お召^{めしめ}、貴公^{あなた}とり不和合^{ふわふわ}の^は中同道^{なかどう}は無用^{むよう}と、いふ^{いふ}氣^きの付兵衛政

經、さもそうちく、某只今出かけしハ密、尋度筋有て、汝が方へ行折から幸の出合途中ながらちよと咄したし、家來共をよけナされよと互追のけ、兵衛政經小聲あり、某此度之節を失ひし科云くろむれ共有やうハ越度、いか成罪、かひ付られんと心も心ならず、然るゝ前司泰村公よハ謀叛の企有よし粗聞及ぶ、汝と泰村公との別ての懇切、此度の大難さへまぬがるゝ事なら、某も一味同心して泰村公又取入たし、貴殿の取なしう預りたく、只今頼よ参る所、兄弟のよしみを思ひ何とぞ此事首尾しておくりやれ、頼むくとまが波なり、だましかくれべふりと乘、扱ハ佐様よ思召か、存じの上、何をかつしまん、内よ謀叛の思ひ立なきよしもあらね共、其元拙者の御主人時頼公がけふたく、よき武士を一人成共招き、とくと地ぐみをかため旗上る相談、貴公の義ハ泰村公切とのい磧時待得たる嚙に満足、某が衝と又に褒美よ預からん、兄人のおかげ

有がたしと思慮なき心の悲しさゝそゝろよ悦び打明る。兵衛政經思ふ
つぼへ當りしと心で嬉しく、猶も打とけ聞んと思ひ、某一味よ成からり、
其連中志らずばすむまじ、京都の守護職三浦の彈正吉村へ、何と喙方よ
くらしりしか、成程く其者の義此度の一筆、次へからヤ某其外近國名
有武士八九人十人計もひべしとヤ、其筈く、扱今一つ尋度事有、彼紛
失せし錦のほ節今よ有所忘れず、盜み隠せし逆外よ有てゑきなき物、定
て泰村公のほ手よ有べし、汝志らずやと尋れべいやく其義へかつふ
つ存せず、まして拙者が盜出しひ致さず、ほ疑ひへ迷惑千万、脇をほ詮議
いへと、どひぬ事迄白狀へ覺有身の志んぼうが、おのれといはす笑止さ
よ、様子ぐらりと志れたる嬉しさ、兵衛政經そゝろようき立、ナ源藤太
郎旗の有所何方よ有、有様よいへ、盜み手へ汝盜ましてへ泰村、そ�で有
ふがあと、いへば惱、是よりうじ千万、存じたら一味同前の其元へ何の

つしもふゆめく有所存せずと猶あらそへばはつたとねめ付、誰とい
ん盜人の白狀、最前より某が云し詞誠と思ふか諸鳥の鳴聲を聞いて獵師
是を取、おのれよさへづらせに節の有所聞ん爲、有様よぬかさべ品よ依
て命の助る、隠しつしまばまつ二つよふちはなすがいぬかと、刀の柄
よ手をかけて切かねまじく見へよけり源藤太へ有たけをいふてがつ
くり腰ぬかし、何どがなと思ひしが一生よなき分別袋底をたゞいて土
よひれ伏面目あや兄者人我罪我てよ訴人と天命思ひ志つての後悔
は推量の通り泰村よ頼まれに節の某盜出し、都の守護職三浦彈正吉村
が方よ預置迫も遁れぬ我命に手よかかるに本望いかやう共に存分恨
とさらく存せずとおれて見せかけぬつくりと、だます思案と夢よも
志らず、悪人ながらけあげの白狀世憲源左衛門經世在京致し罷あれ
ば早速よや遣し都の詮議に彼よまささん、己誠の性念あらば根性を入

かへ泰村謀叛の次第時頼公へ上、身の科をざんげせば、慈悲ふかきは
主人、命たすかる事も有べし。兄弟のよしみを思ひ、智惠付るでりない、不
便さよいひ聞すると恩愛の仁信ふかき教也。う、それく一旦の誤改る
え玄かす、だとへ命の召るゝ共、善心より立返れば死後の面目、兄人は前へ
ほ同道、頼あぐるとまん誠、いふも尤、おたちやれ、先へ参ると政經が、何
心なく行所を太刀ぬきそばめ源藤太だまし寄てはつしと切、南無三寶
たべかられし無念至極とぬき合せ、切合内も手負の悲しさきう所を切
られてたちくくく、よろぼひ伏を源藤太切付く乗かくる、兵衛政經聲
を上、天命を忘れ源藤太兄の親弟の子と思ひ、憐心でたべかられし用捨
して身よかぶる、是も前世の約束かと、思ふ心が目ようかみはらりく
と泣沈む、源藤太からくと打笑ひ、ぬつくりとよふ白状さしたなあ、其
返報まだまして殺した、生けて置てり我わが、たくみの次第皆ぐへらり、

親でも兄でも志つたが因果縛婆のいとま觀念と胸のあたりをさし通せば無念くの聲計あへなく息がたへよけり。志あふせし嬉しやと東西四方見廻せば以前の家來が迎の提灯、南無三寶と走りかけはつしと切て切落し、桐が谷のぬけみちを忍びてこそ急ぎける賞罰を正し定る下屋敷、將軍宣下の祝儀又罪の輕重又隨ひて助る内又親殺し主をいためし科人へ評議いかゞと引残し夜盜盜賊晝驚自囉万買の類族ハ残らず拂ふ出籠の慈悲いかみからながれ来てめぐみよあふぞ有がたき若狭の前司泰村則役義の仰付賢人顔の僕人と人は白洲の下役所のつしくと立入れば、家來大野軍八出向ひ、は苦勞といふ式臺をゑりめよかけて座よ直り、兼て云付し通獄舎の者共へ密よ云渡せしかと尋れば、さんひに書付の通輕き科人の分残らず追拂ひ跡よ殘るハ大罪の者中よ一人究竟の侍、君よもよ存志らるゝ弓削大助、先將軍頼嗣卿のほ

時、は重寶の鷹を射殺したる科、より只今迄禁籠此者を始残らず泰村
公のふ慈悲よつて、命を助け家來分々なさるゝとうまくとのみ込
せ、時頼こそ汝等を刑罰と云付たる本人恨があらば勝手次第と寄すさ
へらず仇する様より聞せ、まだ其うへよかやうくの事共迄吹込置い
ど、たくみの次第云合す所へ、相撲守時頼公の名代、二階堂信濃之介道秀、
役儀又付参入とつゝと通れば、泰村何必あき体みて大儀千万是へく
とさし招く、おめず億せす側より立寄、主人時頼、將軍の召み依て俄の登
城、某身不肖ながら相役又罷越近頃免と應答べ是へく互よさべ
きり遠慮あくや合さん、今朝より有増書付し通ひ早追放殘る科人の此
帳面又引合せいかやう其はからひやせとの御意、それく籠者の者共
引出せと仰よ隨ひ大野軍八下人よ云付呼出す、先よすとみし繩付ので
つくり肥し鬚男、親を殺せし不孝者子の三界の首かせを、かゝつて思ひ

白洲の庭そろりとあゆみ行、主を殺せ玄科人どがくにんハ十惡罪ざいを引玄めて、つながれ出る猿眼さるまなこかく手を以て亡判むはんハ筆の答とうや命毛めのけをとらるゝ迄は、白髮髭ひげ年とし又似合おなじあぬ身の科しなハ密夫ひつぶの女を殺ころ玄くろたる罪つみを重かさねて功者こうしゃ成な、毒藥かさねもりの敷ひき醫い者しゃが三寸竹さんすんちく又からげられ、ひしかきゆひの縛繩しばよのひをんとからからつたふせ秤ばかり其外似せ金似せ物書似せ商人の唐とうわたり、命いのちハとふであつち物金銀唐とうへ投金なげきんの、金の鎖くさりで繫つるでも助たすりがたき科人しなにんを殘のこらず白洲しらす又引すゆる、二階堂道秀帳面ひきわくつて引合ひきあせ、召めし人ひと共とも科しなの次第じだいはいへずと面おもてと覺おぼがあらふ、將軍宣下せんげの祝儀故ゆき輕うるき科しなは赦ゆるせ共とも汝ならは重じゅう罪ざい本もとの空そらの仕置しおき玄くろかしは慈悲じひを以て皆討首うちあ有あがたく存奉そんぽうれど付云つけふられて惄びりし兼そなて内證うちしやく云合あす泰村たいむらの顔詠がほめ返答かへもせずうづくまる、大野軍八約東とう達たつひ氣きのとくとさし出だ、二階堂殿にかいどうの仰あおさる事ことなれ共とも重じゅうき科しなを赦ゆるすがお慈悲じひ此度このたびの印いんを付つて追おはらひ重じゅうてともわれ一旦いつお勤うきあれかしと

挨拶すれば泰村も氣儘きぶるあらず詞をそへいかさま是は軍八が云通り、
は上よりいか様共役人の心次第との仰付、貴殿ご殿と某料簡りょうかんにて助たするよ
助られぬ品もなし、一應思案し案あれかしと悲慈わひじを面おもて見せかけて云くろ
むればいや／＼左様さうようは致たまれまじ、五十一ヶ條の式目しきめよりもれてハ
主人時頼が存る手前、天下の撻たたきは見せしめを表あらわとする宥免ゆめん致たますは事こと
よるよる成敗せいばい然ぜんるべしとぞやける、泰村猶こどもも詞ことをかへし見せしめの撻たたきを
いはゞ博奕ぱくえき諸勝負欠落者かけだちしゃ或は金銀財寶ざいねいざいぼうを預あづかりかへさぬ族やからを、天下の法逆ほうぎゃく
首くびうたべ日本にっぽん人胤じんいんは有あまじ、尤此者共科重ごくわききといへ共此度このどの祝儀しゆぎ
一人殺ころしても無なそく成なも氣きのごく、是非ひし一いつ是は某もしが助たするを當前とうぜんの
理りをくろまかす一言いつごん、押おていはれずさもあらば重じゅうての評議ひやうぎの上うへとも
かくも致たまべし、先傍さきわたりへ引立ひきだつよと云付いふつけられて科人こくじん共うちらめ志のそふそふ立たつ
がり二階堂ふたかいどうをよらみ付いふつけ、軍八と旬じゅんして次へ伴ともひ引ひきれ行跡こうせきより出でる召人めしん

弓削大助春行迎弓矢の家と身をよせて人よ志られし者成がいさむ
かの科より上りやく押込まれ、姿もかゝり身もやせて、繩のかけねど
おのづから見すぼらしげと立出る、二階堂詞をかけ、^四珍ら志や大助殿、
長の禁籠嘸難義貴殿の義は何とぞ命助たく存すれ共心よまかせす、
せめてい某が料簡を以て切腹と存る、子細は是成泰村公の執成故禁籠
の中闕所も仰付られず、其儘勿論一家一門お構ひなきは將軍の恩、其
恩を存切腹仕たとテ上なば彌首尾能跡目相續の義別條有まじ、そこ
を存て拙者がすしめや急ひでかくごあれかしと云渡せば大助道秀殿
の志千万祝着と計應答、泰村へさし向ひ、万事の志慈悲お心づかひ、有
がたき仕合冥加なしと頭をさげ、一禮すれば泰村もすよき侍我味方よ、
ほしやくと思ふ心も逆心を企る下心慈悲で隠して又執成二階堂の
詞共覺す、いへや大助の輕き科、先將軍頼嗣卿の志時、大切成志鷹を射

殺し、其の怨つよき故先當分の籠者、只今も成切腹との心得す、但の當將軍の意か自分のはからひか、料簡違ひで有そふと思ひる。道秀と、押付て見る本心を誰か悪事と思ふらん、大助も身の科の軽きを思ふ一筋よりなりなす詞も取付て、切腹との兼てのかくご今更驚くあらぬ共、最前よりの召人皆極重惡人罪をくらふれり九牛が一毛もあり某が科、大をのぞき小を禁むるは政道、但意趣ばし有ての義か愚案も落すと尋ねれば、二階堂はつたどみらみ、アこざかしき尋事、私の意趣を以て事を糺はば、君の威光をかるべきか、だとへ此方より命を助ゑさする共、武士のちがよくを思へり、望でも切腹、政道も非を打推參至極、命たすかつて首かせてがせの耻辱の何と、未練千万とやり込まれば大助ぬだけ高よ成す過も言なり二階堂、某天下へ弓引す、まして夜盜盜賊の名いどらす、酒興の上それ矢みて、お鷹を射殺した時のちうやう、其耻を呼ひつて勘定よ

たつ事あらば、云て見よ道秀と、顔色かへつて云放す、猶も聞かね二階堂
ア見さげはてたる、比興者尤鷹を殺したる其科へ輕けれ共、先將軍の御
怒つよく急度仰付られたる籠者、其將軍の御出世ならばたずくる品も有
べし、今ハ御世からり宗尊卿のひさべき、命助てハ先君のひ心をもどき
剩ヘ、政道の非を糺す同前、此理を以て某が切腹といふが誤か、無理か
非道か邪かとせりかけく、てつへいより汗をながして云まくる大介
猶もかぶりをふり、其詞くらいく、先君の御意を用ひべ、某よりさき
から禁籠せし科人、數多有をあせ助た、此返答へくと詰かしれバ愚
かく、井の水と大海と一口よいいれず、天下の科人ハ大海の水の如
く、一人の心を以てせきどむるよ及ひず、汝が科ハ井の内の水、先將軍御
一人の心よそむく、罪輕ふして其罪ながすべきらしい地なし、くり事をい
へず共早く切腹く、異義及ばず、格勸者云付縛首川原み恥をさら

そふよりかくさせよ大助と、席を打て云放し助る氣色の見へざりけり、
泰村の云なだめたすけんと思ふも一物詞ふべ、双方の論議尤く別
て二階堂の詞一理有さりながら、近きよ當て遠きを慮らず先將軍頼嗣
卿政道正し給はずといへ共いまだ此世よましませば、万一大介たすけ
よとほ赦免の意くだらば、切腹させて跡で後悔よしそれどもあれ
一旦此泰村が指圖の詞反古よにならず、ヨリ大介命ハ某が助る切腹
及すといふを押とめ、そりや泰村公量負の沙汰に政道がかたよる、大
助をたすけ若又は上よりふとがめあらば其時の何となざるゝ、いいら
ざる非叛誤りあらば汝も頼ます某が腹切ては前への云譯いか様
やてもお助なさるしかくといへ然らば某是より直將軍老中のお耳
よ達し、後日の難義の泰村公お渡しゆが合點かいふよ及ず此方へ請取
こりやく大助何をうつかり宿所へ歸つて休足く、テはつと立上り

禮れい やも恐おぞれ有、彼かれ唐土とうど の 肺公はいこう が こゝ門の會まつり まぬかれし、項伯こうはく が 恩陳平おんちんぺい が情じやう えへし御惠ごひみ有あがたしと跡先あとさき も思おもはず 玄くわらす立出だつしゆ しが、よくしとや思おもひけん振ふりかへつて立たつ どまり、二階堂にかいどう をぐつとねめ付つかつけおのが家形いえがた へ立歸たきる、二階堂にかいどう も泰村たいむら も顔ほぶり合あて 挨拶あいさつなく、牛うし と牛うしとの突合つつきあ み 角折かくしりく かたも見みへざりしが、俄そよさまさまぐ 勝手かつて の 騒動さうどう 事こと こそと見みへたり所ところ へ、大野軍八蒐おほのぐんぱく 來きり 最前さいぜん 引ひす 乞置こぢ い科人かじん 共とも、助すけの者もの と一黨ひととう ゆかたまり、何なんか恨うらの筋すじ 有あと ゆ是ぜ へ切込きりこ ひと、おのが仕業しわざ を押おつし み 大息おおきつ ついで うつたへけり、泰村たいむら わざとけでん顔おほのうらわざとけでんがほ 、よつくき徒黨とだらう の業人ぎょうじん 原仇はらむな でかへする恩おん 玄くわらす、一人も殘のこさず討うて どれ是ぜ 三二階堂さんにかいどう 、老人じいじん の太義おおぎ あがら 働はたらく 召めざれ、某も が名代なみだい ゆ軍八ぐんぱく を相添あわせ る、兩人腕うで のつゝ かん程かんてい 斷捨だんし く、某も が手て をおろすよ及およすと、遜支度じんしど する兼あわての思案しわん 時頼殺ときよりごせき すたくみが違たがひ 二階堂にかいどう ゆふりかけて、軍八ぐんぱく 合點あて かぬかるなも、目め で玄くわらすれば 目め で請取うけとり 合點あて くの詞こと

よつれ足早よこそ立歸る、二階堂の泰村が仕業と夢みも思ひこそ、身
游ゆへして待所へ最前遣おとしれし獄屋の科人、一手よかたまりつばなの穂先
引さげく大音上うわ、二階堂道秀との己よな、たすけんとの給ふ泰村公の
詞をかへし、跡の評議とひ殺す思案か、とても遁のれぬ命あら相人あひてどりし
て死ぬるかくご面々繩を引切うち物を才覺して向ふたり、めいどへつ
れる老ぼれと意趣よこかして詰かけたり、ござかしき蠅虫めら、年こ
そ寄たれ相摸守時頼公の臣内、二階堂信濃介腕わの有男、愚人共を相
人とい、不屑なれ共三條小橋出合がしらよアこいと、討てかられべ無二
無三東西四方八方より、獨目當よ切結ぶの危かりける「次第也、軍八ハ高
みの喧嘩けんか、シテ討うとれく」と心よ思へど手ハ出されず、まして手ハき二
階堂、命限はりよ働はたかけば日並がかれりきみわるく跡先見廻し遡のて行、大勢
の切立られ色めき立て見へたる所ハ、七八人が後こうよりとつたといふて

組つゝを引はづして取て授あたるを幸、遡るを摑で人蹠あたりより近付者もなし、遡行跡も不敵の二人双方を組付をはつじとふんで踏たをし、取付所を又けたをし、どつこいまかせと引つかみ、めてよさし上弓手よかい込、一ふりふつてきり／＼くらま天狗のはがい玄め、大剛力士の二階堂、三界四海東海も名を玄られたる老武者、功武者はやり武者、風をむかせし猛虎の勢持たる罪人投込／＼暇うて立歸る勇者の譽義者道何れ、かんせぬ人はなし

○第二

功有て賞せず罪有て誅せすんば、唐虞といへ共化するとあたひずとかや、弓削大助春行の泰村がはからひよつて、刑罰の罪をまぬかれ二度家形へ歸り花妻の悦び姑の祝ひの水の酒盛も、家内賑ふ計なり、一家一門他家他門祝義の見舞臺の物思ひ／＼の付届表ざゝめき持はこぶ、斗

樽たるより添し巻物まきものの、絹笠造酒きぬがさつくりの進と札付で、中居なかゐが取て、妙めうと渡す、眞綿まわたの堤つつみの藤太金安かねよりとぞ見へよける。鳴一番鷺かみあわせ一羽時宜ときのならぬの福宜ふくぎ中間なかま、ひんとはねたる掛鯛かけだいの弓の師匠しかうじょうの弦澤彌惣げんざわやさ、あんでのせだの土佐の住人扇子すきわの箱はこの桐きりが谷法橋やなはしきばしよりとぞし出す其外馬代太刀折紙ほか、或の珍物ちゆつもの珍菓ちうがの箱心はこごの進物しんものを手てよ「奥へ披露する、嬉しさの酒さけがどもなふ、母親おやぢ、姉あねと妹いもと手てを引れ、機嫌きわいの上うえ猫ねこなで聲こゑあんと姉幾世あねいくせい嬉うれしか、泰村様たいむらさまのお情きずなで大助だいすけのもどりやつて今宵こんよいにたんと土産みやげが有あふ、ま、ま、醉ゑました、此やうみ酒さけのふどつたもこなた衆の父親とうおや弓削刑部殿ゆげゆうぶでんより別れてから、めつきりと年もよる、ぶがんぶがんもありとこやらがふりくと、亥いとまでがなふて、淋さびしい物もの、妹の松世まつぜ、今朝から來ての心づかひさりながら、そなたのつれあひ、原田六郎はらだろくろうの今見へぬが相むこのめでたい事ことよあれふそひ、見れば方ほうから進物しんものも數多すうた、ほしいでれないが、智大介ちだいすけの手て

前姉のおもへく、ちりむすんでも氣を付る筈人も來ず我もこすゞふぞ
思へく有ての事かと尋れば、姉へひとつとり、母様のなんのいあ定ては
用でお取込、一家の中の義理順義云出してもくださんすな、何の如在が
ござん怎よと挨拶あれば妹の松世、夫の心よ一もつの有といれずき
のどくさテイおそふても見へませふ、母様ヒト少ヒトお休みとまぎらかせば、い
や／＼侍サモヒ禮義がふも此家の小身でも弓矢の家つき合ハセキ歴ハセキの大
名なみ、鷹狩タカガリでも鹿狩シカガリでも、供ヒツとあれば一番がけ、北條三浦の兩家スミも
手をふかるし家筋心やすい内證シテ、筆同士ヒツシの根が他人ドモトドモよ心を
付て中のよいのが母への孝行カク、苦クをもたせてたぢんなと老の心のそこ
そこよ氣を付る内草臥内草臥のとろ／＼ねふれべハズ、こりやお迎ひか、奥へゐ
てまどろまん娘お玄アキやと引つれ入んとする所へ、取次の侍罷出ハセキ、若狭の
前司泰村公より、お進物のお使者、大野軍八と名乗主人へ直談との義通

しやさんやと覗へひ、それの大事の使是へとやせといひ建立、親子
の奥入よける。主の威光の鼻高く見かけの通内證も、誰がどいねと大
野軍八罷通ると卷物かざらせ上座みなをれべ、大介春行向ひ、お使者
お苦勞とあしらへば、ほ悦の口上ゆもくでん、事相濟ほ祝儀の音物受
納せられよ、此度の大罪まぬかるし、主人泰村の恩定て龜畧有まじ、
扱わけて仰こざるし、近日將軍宗尊公、鷹狩の義よ付密みお頼なされ
たき筋有、同道ヤセとの義すくお供致したしことぞ相述ける、コレほ懇志
の至近頃大悦至極、仰の通某切腹仕るべき所、泰村公の慈悲よつて
命助り、母女房一家一門の悦び、ほ恩の何と報ぜんとア暮す計、ほ頼とは
冥加なし、いかやうの義か存せね共、心命を捨ても相勸たし、宜敷は取成
頼上ると挨拶取ゝ成所へ、相聟の原田六郎兼貫、ほ見舞アミ三ぼうヌ髪
斗争をすへ、自身進物持來れば、一家の參會ほ免と使者よ應答ヤレ珍らしや

六郎内儀松世は赤明より參られ何か取持禁籠の間万事貴殿の世話過
分くと取つくろひいざ是へとぞもてなしける、六郎座はなをり見れ
の他家よりは客も有は接拶は後程くく苦しからず若狭之前司泰村
公よりは音物のふ使心やすきは方といふよ折よく六郎兼貫は祝儀入
入ん爲心計の進物と三ぼうよたばね熨斗大助よさし出せばはれやれ
いはれぬ事を女房も松世も是へくと呼出し最前母人の心つかずと
呵られしを奥みて聞其進物おめよかけて悦べしませどいへば女房是
れくうち鮑熨斗昆布めでたい内でいつちの司のしつくといふ心め
でたいう妹といへど夫の心へ見る定てふかいお心が有ての事でござ
ん玄よどよそよあしらふ計也まあ持てて母様へととらんとするを
六郎おさへ大助殿へ目當の進物披見あれと突出せば心へすと熨斗
引さればこひいかみ九寸五分の腹切刀さやをはづしてのせたるは思

ひがけなき祝儀なり、使者も恂、姉妹そばようちく、詞なく口をとぢて
ぞひかへるる、大助さへがす、相智^{相あひび}の祝儀、氣が付すぎて合點ゆかず、心底
有やど尋^{たづね}れば、六郎ゑせ笑ひ、寸志計のたまもの介錯は某、ねたばも合せ
て罷有、心志づかよお腹くく、チウ品よ依て切兼まじ切腹の子細^{ちう}にな、問よ
及べず、助からぬ命助かりし、最負^{ひひき}の沙汰、武士が邪^{よじ}の政道をもつてま
ぬがれ、生ながらへて何の煩恥^{ふらう}獵師鹿を追^おて山を見す、盜賊金を見て、主
有を知らずとの貴殿の事、命だすかるよ目がくれ、後日の難を知らずそ
れ成使者の主人泰村公、慈悲^{じひ}を以て命助^{たすく}る人よあらず、深き所存有どよ
らみし眼^{まなこ}り違^{ちが}ひじよしそれともあれ、罪^{つみ}を罪^{つみ}と定め切腹するこそ武
士の本意、わるき事はやまい急で最期^{さいご}あれかしと、いへば大助かぶりを
ふつて、いやくそれへ一圖の了簡虎穴^{とらあな}よ入^いんば虎の子は得^{いた}がたし、
危^ききよ臨て福を得る人間の習ひ、明日からいめよあひふか迫^の水の呑^の

置罷ならず此進物返辨と突もどせば。比興羊が虎の皮をかぶり豺を見て戦く、泰村といふ虎の威をかつてたすから共豺といふ時頼の政道もあれば、罪科遁れず其時こそ、一家の煩よごし、鷹の志ね共穂につまずと世話よいふを玄らずやとせりかけへ云々氣のとく聞もつらさの妹の松世、六郎が袖をひかへ、女のさし出し事ながら、あなたよござるハ泰村公のお使者あきれて物もおつさやれぬ道へ道でもおまへも一がい、蟹の横をすぐじやと思ひ、屏風引共まともよや立ぬ、玄ろい黒いを玄らべ合つのめ立てゑきない事、いがんで成共大事の命たすかるが世間のならひ、外様むきよ遊べせと、云まらせば姉幾世、大介みひとつそみて人ハ免もあれ、命助かる程めでたい事あらふか、道だてするお人でも、まさかの時の命をおしみ、牛房程な尾をふつて、一はな立て遡る物、お使者様、そふと思し召れずやと、使者へこかせば使者へめいひにく、左様な事

でもぞざらふかと、よらずさららず取合す、耳をふさいでるたりける。互
みどめる女房がだき付わらの猶さか立、大介居なをり三ぼう取て投の
け、進物の返禮（へんり)あれ共、今云出せばお客へ不禮、重て急度入んお歸りや
れど、いふ程つのる六郎、何の客、泰村の家來迎（むかひ)貴む程氣よくぬ、但腹切
がいやならべ、介錯（かいしょく)から手を出そふかと、反うつてつめかくれべ、大助た
まらず刀追取（おととり)、やういはせておけばつき上る、腹切まいが何とする、（ときらせ
て見せんと互の身がまへ、兄弟中よ立隔り、あなたをなだめこなたをお
さへ、とめてもとまらぬ二人が勢（いき)ひ、大野軍八見かね立寄、女の手業（わざ)よ及
ぶまい、そのかれよとわつて入、双方いひ分某が囉（うそ)ひナと、いふもよく
てい六郎兼貫、よき相伴（とも)とそつ首取、はつたとけたをし見むきもせず、大
介めあてと挑みあふ、軍八（ぐんぱち)起上り、夢見たやうみ思ひしが、迎もしかも
る喧嘩（けんか)のさへ人、大介よ取付て、どつこいさせぬと引むる、足手まとひ

とはねのくれば、思ひずしらずころくろくろびを引てもこりもせずあなたへよればけたをされ、こなたへよればつきこかされ、相人どしょり相伴人、息がはづんでひい／＼、ひどいめえ合計也、母ひ奥より走り出、やれ暫くと申す隔り、様子ひ奥よて残らずきく、六郎ひわかけ故了簡がかたづまる道を立、義を立て、死ぬる計を手柄といはず、たすかる時ひ身をまつたふまさかの時の主命、かゝるを誠の、武士といふ、禁籠せしが、恥もあらず、漢の太公越の勾踐、籠者を遣れ、會稽の恥辱を雪し例も有、人悦ぶよハ共よ悦び歎、時よハ我も悲しみ、人と共よ樂を以て、樂といふどり聖人の詞教るで、あい聞分て忘づまつてたも六郎、大介もかならす／＼意恨をふくみ賜ふあと、母の詞のふもたきよ違背にならず、テはつといへ共心の劍と劍、齒の根ならしてよらみあふ軍八はへらず口、是ふ袋、聟殿達の喧嘩、ふへたのまりで近所へ飛込、ふまれたりけられ

たと手をさすと後家の古家、いらいかつていかぬめいへく鶴の一聲
おべゞの泣聲、姑がいよなだめてと、身うちをさすりひかへる、親の詞
と兄弟の娘れともよさし出て、母様のお心やすめ、虫を忘なせてくださ
れど、詞心も打そろひ、共よなだむる夫婦中、わりなく見ゆれば母の嬉し
く、それく、姑への孝行れ中のよいのが孟宗郭巨機嫌なをしてたも
二人の衆、聞べ大助泰村公よりお召と有、お使者と同道早とくくと、い
ふよ氣の付、大野軍八、南無三ぼう、何やかやみて大事の用ばつたりと
忘れし、時刻うつるいざふ供、お出あれと立てる、心すまねと大助も、母の
詞と泰村の使よつるし跡やさき、思ひまわして立出しがヨリヤ六郎、用有
て某は泰村公へ召寄らる、かまへて逃たぼど、かげ事いふたら赦さぬが
合點か、それ程よ泰村が大事か、命たすかつた輕薄よ、お髭のちり取
鼻毛の掃除のどの下から耳ねふれ、そりや忘れた事、恩を忘らねば人

汝がごとき行方らぬの無法者、相手も成もむやくしとゆかんとする
と六郎兼貫、刀の鎧をつかと取、無法者の筋聞んと引とゞむればふり歸
り、妨げするどぶち放すと、又おこり出す互の虫腹母おはなのかけより六郎が、
持たる手をもぎ放し、喰く泰村公ひでよお侍兼大助おほすけござれ、お使者しめしは苦勞くるら。/
と中よ立身を思ひやり行足もとを見る軍八何思ひけん立かへり六郎
とやらもの云いふい始、最前より主入泰村を、ないがしろよくゆつた、挨拶あいさつ
人をよく踏たただ、頬ほおと脚あしとの忘れぬと云捨てこり歸りけり、其そのあごをき
りさげんと飛出とびだるを母兄弟、左右もすがつて引とむれば、心はやれどま
まならず、胸はもやく氣はむきやつく、何がなほしき相手の進物、泰村
よりの送りもの、ばつしとふんで踏くだけば、卷物まきものちつて縮緬ちりやんの小し
のよりし姑おばが娘むすめへ渡すをゆすびん男おとこ、さやまかれて是非ぜひなくも家形いえがた
へこそ、「歸りける頃ごろ」建長五年衣更きよりや、鎌倉山も色つきて、青黄赤白草

花のさかり又なき宗尊公木の小鳥のとやおどし、遊覽有べし迎野
山をわくる、鷹狩や、は供の役ハ秋田城之助義景時頼の名代とて、名所古
跡の案内も跡よつゝきて若侍、吹矢吹筒ゑさし竹、お鷹の役ハ鷹すへて
さしめき立て出賜ふ、は大將ハ若年の色まだわかきばかり衣、縫毛の駒
の足並も戸さらぬ御代の其昔仁徳帝の頃かとよ、俱知といふ異鳥をば、
酒の君よ下されし名付て是を鷹といふ、和泉の百舌野の鷹狩も國よ始
る印とかやけふ將軍の遊覽よ數多の、鷹を國々よりさしぐる中よ大鷹
のはのしゆたか又此春のとふき祝ふ石見の國、何がしよりの獻上鳥始
て合す小鳥がり、お先よ立てれい／＼の、聲よつれ立鶴をつゝくりすへ
て、筑紫からさゝぐる鳥のやさしさハ手よつきまとふ兒鶴鷹、さつぱり
のすやもろはがい鶴雀鷹の二ゑだれ加賀の前庄師高が送るくるく
鵠雀の小鳥を名ばよ駿河成、あんさいよりの馳走鳥、其外國々在すより。

名高き鷹を四十八引大合せて五十疋、鷹者大引列卒の數よみつくされ
ぬ朝路が原しげみくを退出し草ふかくこそ「入賜ふ、若狭の前司泰村
」の將軍の供も己とさがる心のたるみけふ本望の吉日と上見ぬ鷺の大
鷹を家來よ持せ行跡より、チイと呼かくる見れへ兼て云合せし、佐野
の源藤太經景（ヨウカイジン）なり、程なく近付是へくに油斷（ユダン）の躰心へす、今日の鷹狩
の將軍宗尊卿の命をつかむとやおどし、某の時頼の家來なれ共に頼よ
依て心を合せ、日本を手よ入んと心をくだく、天のあたふるをとらざ
ればかへつて罰（ボツ）を蒙るとや、思案有て然るべしとするむれば、泰村は
くく打うなづき、汝がヤごとく、今日ならで本望達する事有まじと思
ひ、早先達て弓削大助を頼み、宗尊へ遠矢よ射殺す手筈萬一射はづすま
い者でなし、殊々城之助義景手ごとき相手、仕損せばいかせんと胸に
どうづき、ちゑまんくの源藤太分別あらば聞たしとのせかけられて

打うなづき、そこを存じて拙者が計畧日外^{ひだり}助なされし盜賊共^{どぞく}兼て
金銀をあたへ頼み置、いつ廻も鷹狩の歸るさへ晩夕暮^{ばんせき}及びて頬を隱
し、城之助諸共^{ちゆう}打殺す手くべり早用意致し置、ふきづかひあられなど語
れば泰村ぞくくいさみ、天晴の^{開あつそれ}働き才智^{さぢち}、又時頼を亡す事人力^{ひと}
及ばしと思ひ、一の宮明神へ調伏の願書^{ねんじよ}を込^こ自滅^{じめつ}さす思案是も智惠で
有ふがなと語れば源藤太かぶりをふり、鎌倉へ安^いとほ手^て入ても、
心がよりい西國武士責來らば何とあされん、そこは兼て云合す都の
守護職、三浦彈正吉村といふ者牢^らの体成^{てしな}しを某が引立を以て今ハ
大身、今度の味方の一筆、心底見届盜置し錦の^{にしきの}海節も彼が方へ預置、西舟
三ヶ國のおさへよ頼む、此外^{ほか}よ氣遣^{きうづけ}ハ只時頼計、何とぞ急^{いそ}よ取ひ玄ぐ思
案はなきかと尋れば源藤太近くさし寄^よ爰^わ一つの幸有、主人時頼^よは
月小夜玉豐^{よよ}とて二人の妻有、此玉豐^{よよ}とは二階堂信濃之介が娘、生れ

待て疾妬ふかく月小夜を妬そねむ彼めをだまし込仕様ひさましよど
かふする内日も西天よかたぶく野伏共をかたらひ道よ待請んずはと
やさべどもドは敵對有て、色目をさとられぬやうふんみつゝしを
ふせて後約束の執權職ハ某とくに内から職のみ舌打してぞ別れ
ける魚の溝きよすますといへ共水のしたゝれをはなれずとの弓削大
助が身よぞしる原田六郎と詞たゞかひさは有まじと思ひしよ思ひの
外よ泰村がのつ引させぬ頼の密事そむけば恩をしらぬよたりとや
せんかくやと胸の内、鷹野のお供の道せばくあゆみ兼つゝ行なやむ原
田六郎兼貫よ鷹狩の供え、ふくれて獨一筋道行かしつてなむ三ぼう、
又大介めみ出づくらせし頬見るもむやくしと俄よすへる目の内十面の
つしきとおゆみくる、大介の六郎と見るより身内よ四寸の釘うつて
かへたる我心志らせたいと思ふ程心數さぬ身の要心右よよけての足

場がわるし、左へよけべ、刀向の勝手、犬に出来し猿眼、らみつめて行過
るを、大助春行立とまど、六郎兼貫暫しくと呼かくれば、事があふ人と
待きつさう、用事有か大助、但常くのうつぶんをはらさんと思は、場
所のきらりじいざこいと、鯉口くつろげ早切かけんいきほひなり、やせ
やまるなど手を覆、今まで汝はむかふ所存少もなく、勿論遺恨よさら
さらなし、其根づよき性念を見こみ一言云たき事有、おづまつてくれよ
と、狎なだめ、日外進物の折から、云つのめ立し貴殿の詞、今思ひ廻せば孟
子の金言、山を越れ、山あきと心得、海を越れ、海なきと心得、登かり
涉りかゝつて後悔千万、それよついて頼み度事有、聞てくれるかくれぬ
氣か、心底いかよと尋ね、六郎あきわらひ迫も及ぶまじと思ひ降参か、
但は泰村が内證へ引入ん手だてか泥水のすゝつても非道よ組せぬ、
きのうけうまで類をふりしをうつてかへ、頼みたきとの比興千万、聞え

及ずわほくの筋いつがなく存じもよらず、姑の歎を思ひ是まで堪忍の胸をさすりしり幾度、折こそあれ此所でよびかけたが絶命^{せつめい}絶命^{せつめい}いざぬけ但こつちから切かけふかいかみくとせりかけたり、大介涙をうかれ恥かしや面目なや、谷七郷の人口^{ひとぐら}ふさげ共其方一人よあふて身内よ涼汗^{ひやあせ}是を思へば人の我^が身を亡^{ぼろは}す劔^{つるぎ}ぞや、去籠者赦免^{ゆとりしゃめん}の中、某一人切腹せよと二階堂が差圖^{さしお}無念^{むねん}と思ひ、何とぞ命たすかり、此うつぶんをいひんと思ふ我慢心^{おがまんじん}泰村の慈悲^{じひ}深き故助られしと計心得^{そごし}底心^{そこしん}一物有事を忘らず道だていふ汝^汝迄詞^{ごく}をあます今^{じん}心外^{じんざい}され^ばいへ命たすかりし恩^{おん}恩此返禮^{へんれい}せすんば彌武士の道忘らず、今日泰村一大事を頼ひ心得しと請合しが一心よ誠といふ魂^{たま}一つ有て思案取^{しわんとり}よ、さつぱり打明あかし聞さんとの思へ共、万一他言有て^ハ某が彌腰^{みよ}ぬけ、恩を仇^{あわせ}で返すといふ物、金打^{きんとう}の上^うて帖したし頼みたきとの此事と何かいつしむ

胸の内ばかりかねて六郎さちそふ云いの刀の役、聞た上よて事より頼まれまるい者でなし、一大事とい心元なし、早く語れといふ所へ泰村おほむらが早使馳來り、大助と見て手をつかへ主人のお頼みむすめアセし一大事時刻じこくうつり候、早くくくとの仰なりとぞ相述のべける大助取敢あず、此方こちらよも心せけ共、首尾を見合思おもひす延引、追付吉左右うざんと使を歸きし、あれ聞れよ六郎、是よて心底こころあかすべけれ共、淺草への往來わうらい絶きず、又使のくるも忘わすげし大義ながら墓田村の無縁寺迄まことにあゆんでくれといふも尤尤げよく人目立もきのぞくいざ同道と心とけ引つれ立て入相のかねなる「方へ伴ひ行は」、鷹狩たかがりの暮限かぎりは歸洛きりの駒こまの足東ひがしがしらはあゆませて朝路あさぢが原の道草みちのくさも青あおみて走はしらみて、神風かみかぜばつと吹ふくれば俄にわかよけしとむ駒こまの足、は大將だいじょうも手綱ひづるをゆるめ、鎧よろい一あて當あてさせ給たまへど、跡あとへくくと走はしり込こし、は落馬おちま危あやし見みへければ城之助義景よしひき走はしり寄よて、は馬の口取四方よのくを急度きゆどねめ

まひし、あらふしがや傘車かさぐるへナス及バ水火みずかの中へも飛込此駒、恐るじ
物もめよからず何を以てけしとむやらん、それ馬べんを變かわをしらする生
類るい、さつする所此あたり又宗尊公むねゆきへ仇むなする者ありと覺る、家來共立別れ、
草隱かくれ志しげみの間、詮議せんぎせよと下知げぢすれば前司泰村押おなめおなと
しや義景よしかげ、今靜謐じょうひつの世又誰か弓ゆみを引べき、土風どふうも吹ふきもされ、人馬共とも立
とまる、は馬ばを引立ひだりすされよと獨ひとりあせられいやしく左さよあらず、君子きじに
危あやしをのぞく、別條なくば重疊ひびき、先さきみみせよといふ所へ、四五十騎このか
くし勢時じをとつとぞあげよける、あんよたかかひす待まつふせと犬引鷹たかひき者又
お馬まを引せ、城之助義景よしかげまつさきよ進すすみ出だ、何者なれバ路じ次の狼藉ろうせき名乘なま乗の
て勝負しやうぶと聲こゑかくる、一味いつまいの者共類らひき引包ひきふく何者なれバ路じ次の狼藉ろうせき名乘なま乗の
長範はな又三代の後胤こういん黒坂くろさかの長かんと云日本盜賊とうぞくの司つかさ、恐れあがら宗尊卿むねゆき
のほ裝束しょくぞくをはぎどらん爲一騎ひときをおこす、命おしくば旁そばも衣類いりをぬぎ通とお

られよとぞ呼ひつたり、城之助あざ笑ひ、山賊夜盜の類とな。こぎかしき望み事、いで物みせんと大太刀ひんぬき、つけや若者切とれと下知し乍よ討てかしればあまさじと、入亂れてぞ戦ひけり泰村もさながらよ素手ふつていられねば、太刀拔そばめ聲はり上げ、將軍の御供よ若狭の前司泰村が有とひえらぬか、命えらすの業人原、何百騎でもこい／＼と、亥やうぶよ名乗おかしさよ、參りそふと源藤太頬をかくして討てかれれば二討三討てう／＼、とうと合せてコリヤおれ亥や泰村亥や鹿相をすあと顔つき付、切むすぶ内云合す太刀の刃音と囁き聲、もふよいかけんひけ／＼と合圖ようなづきまつかせと遡行を比興者かへせもとせと聲計、追かけもせず引かへす、城之助取てかへし、泰村公御苦勞、いで立かへつて一軍とおどり出れば見ぬを幸某が切先よ八九人十人計切伏せしと、うその有たけせんしやふも、時のまよあふ計なり、城之助義景、手

ごろの大木ふり廻しく、一人づゝひまとろくし將棋だをしと待かけたと、一度よかしれと野伏もかたまり、追取まいて打かくる弓手とめてようけあがら持て開てはつしと討、一ツなぐれば二三人こなたよ十人十五人おたるが此世のいとま乞命有ての褒美恩賞是よこりよ道才提跡をも見ずして逃てんけり、あい手なければ勝時上、お馬を引と呼られば、ぐぐと引出す駒の口取引まへし、よらみ廻せば泰村も、殘念至極の極重悪人、見かけのかへらぬ武道のいきごみ、義景泰村兩輪の口取、四方八方眼をくべり獅子の勢鰐の口遁れのがるゝ野中の騒動切静めたひ義景一人、喰違ふたひ泰村一人、善惡二人が二行立、供申在鎌倉手振かふり出す足拍子、お馬の足並玄つとんく、玄としんとん、十よ三四の大將軍乗たひ鬼かけそふたは義景かけ立、引立引直し、もうりやう鬼神のあれたる勢に所をさしてぞかへりける

○第三

壽を養ふ者の病み先立て藥を服し世を治るの君へ亂み先立て賢み任すとかや、鎌倉の執權、左近將監、經時逝去の後、北條相模守時頼、天下の政務として父泰時の古例よからず、下万民の訴を正し、最負私欲の沙汰をいましめ、道の道たる決斷所執筆の役へ二階堂信濃之介道秀、に取次ハ秋田城之助義景、双論出入公事訴訟、僉議の役へといでうよ、かくる下部が繩さばき、いづれ偽る品もなし、訴多き其中よ一の宮明神の神主、四方四面の箱をたづさへ、時日夜更み及び三十餘りの侍、此箱を持參り願望有て奉納の箱、神前よかけくれよと頼み罷歸る、所もアササまして願主も志るさず、ふかくつゝむ子細有ど、ゆも氣遣内を改テさんとひらかんとすれどもいづくより志め置しか手よ合す、禰宜中間が寄合色よと工夫致せ共思案よ落す、打わるよもわられずあまり不思議よ存、御上聞

よ達しやさん爲持參仕ひとさしあぐる、城の助取上見れ共々明べき
所見へす、箱の面よ一黙を書、四方四面を金物すくめ、大磐石でもくだけ
ぬ、掠二階堂もさし寄て、何よもせよ力よまかせひらいて見んと、兩人が
汗をながしてゑいくくと、捨ても抑てもひらかべこそ鐵をかためし
とくみて、二人もあきれ見へよける、時頼あざ笑ひせ給ひ、たゞへば玉を
わるよ手よすへてうたび、玉のどんで手をくだかん、其箱も力を以てひ
らかんとせば、腕をかへつてそこなりん、見れば箱の上よ一黙有、それこ
そひらくこぐちよ、それをいかよといふよ、一天開け天地をかね、いつ
といひ、口をとぢ天といへば口ひらかん、とぢたる時のひらかねば叶
けぬ筈、是れ一を打て万を立る道理急いで文字の上をたゞき、ふたをひ
らけと仰み立たがひ、城之助こぶしを以てはつしと打さしもかためし
金物はづれ、四方へばらりと開きしりげよ理と見へよける、内よこめし

は調伏の願書、時頼の紋を付わらをもつて形を作り、願主若狭の前司
泰村泰村としるして有ハサツト驚おどろく城之介二階堂も又アフリ恂アフリ見慮ケンリュウいかゞと見る所
又アフリ時頼公其箱是へと手ハンドよ取、以前の如く取繕アフリひ、ヨリ神主箱の内別義
なし、侍が望の通り神前ミツルよかけ置アフリべし、披露アフリせし事隱密カムフラフと仰ければ、何か
れ玄アキラシす、有ハサツトがたしとおのが宮居アフリよ立歸アフリる、二階堂城之助詞アフリを揃正アフリしく
君ヒカルを調伏の願書、其儘アフリよ返さるも段アフリ愚案アフリよ落アフリすとナ上アフリれべ、ふろかや謀
計アフリの眼前の利潤アフリといへ共、終アフリよ神明の罰アフリを蒙アフリる神の捷アフリ時頼アフリよ罪アフリあらば
調伏せず共アフリおのれと亡アフリびん、女童アフリの事アフリわざ信アフリする泰村、大海アフリの飲アフリほす共
一滴の水アフリすアフリられずとい彼が事、私の趣意アフリと以て事を糺アフリすアフリ愚將アフリの
仕業アフリ、内外取沙汰必無用、折アフリこそあらめと大様アフリ、天下をさべく胸の内と
なり伏アフリす計也、かゝる所へ墓田村の土民アフリ共、首なき死骸アフリ戸板アフリよのせ急の
訴アフリ俄事アフリと、白砂アフリよどつかとふろじため息ついて、さあく五郎助殿罷出

ていわしめせ、^ミ見付た人出ていわしめせ、^ミ村でハ庄屋わきもなざる
てこなた、玄きなしへ出でいわしめせ、まあこなたからばて、ひらふと互
えせり合うづくまる、城之助聲をかけ^{アマ}ヤアかしましい、土民共なまく敷
死骸檢者^{シガイサン}の非判^{ヒバン}も請す、押付てほ前へハ何事持て歸れと玄かられてそ
りやこそ見よど猶^{シテ}ありごみ、二階堂詞をやへらげ、互^{アラビ}ニ争ふ故事やかま
し、こ^ヒい事も何^シもない、子細^{ハシ}どふ玄や何^シく、アツおづく五郎
助はい出^{アモ}私村^{モカ}無縁寺^{モクエンジ}と^シ明寺^{アミタ}あみだ如來より外^シ人きれのない所
首もない此死骸^{シガイ}ころりと^シかしてそこらが血だらけ^{スル}盜^{ハサビ}人の玄^{ハシ}か
子細^{ハシ}何^シも存せずと^シ言上すれば時頼公^{シロノミコト}始終死骸^{シガイ}みめを放さずや^シほ
思案あり、喧嘩口論意趣切ならバ首取^{ハシ}及ばず、まして盜賊の業共見へ
ず、おのれがつみ己^{ヒメ}を貴得心で殺^{スル}されしかだまし討^{ハシ}み討れしか何^シも
せよ大小衣類紋所^{モハタケ}を玄るし縁類^{モク}を尋よど仰^{ハシ}み隨^{ハシ}二階堂^{モカ}祠^{モミ}を立て

ふれなかず、城之助義景重て土民を呼出し、旁大事の証議^{さうぎ}其方共も駆用^{かみよ}よりつて呼出さんもし親類の手がしりあらば早速^{はやそく}注進せよ、罷歸^{ぱいき}と遣^{おと}されど遣^{おと}志りぞけ、それ物の一一致せざるより人を以ていわしむるとア所^そ詮此死骸^{死骸}往^{くわん}みさらし諸人の實否^{じつかう}を窺^かへ^い是非明白^{はいめい}たるべしとア上れば、いやとよ往^{くわん}みさらすとい、罪の虛實^{うじよ}を定^{さだめ}町人百姓の類かりよも武士と名付^{なづ}し者罪科^{つみが}も定めずかる。ト、數見せさらば、其一族の恨^{うらみ}万民のそしり誤^{あやまつ}て改^{あらなむ}る其時頼が誤^{あやまつ}ハ天子將軍の誤子孫の耻辱^{ちじよ}旁^{かた}以^て麗^り暑^ひなりがたしと理非明らか成一言^{ひとこと}よ押^おてアさん様もなく平伏^{ひよ}してぞ見へよけるかしる所へ當番の侍死骸^しの義^ぎよ付^は訴訟^そとア、女三人相つめし通しアさんや^{うか}親^{おや}へば、それくとの上意を請^うさかりの「娘引^ひつれて六十近き老の身のほ庭^{にわ}よ手をつかへわらひしお弓^{ゆみ}役の組頭^{がしらゆ}弓削^が刑部左衛門とア者の後家是成^は幾世松世^{まつよ}とア二人の娘夫^むよ別

れ入家を取、姉又ハ弓削大助春行とア夫を持せ、妹聰^{ひき}ハ原田六良兼貫^{かぶ}、小身なれ共皆將軍家の臣家人、然るニ二人の聰^き昨日鷹狩^{たか}の供先より、ちくてんして行方失れず、今日の只今迄有所方々尋る所切殺^{きつさつ}されし武士の死骸^{しがい}役所へ持行^{もちゆき}しと聞とひとしく胸^{むね}さへぎ、もしや二人の聰^きの内かと先へ廻るゝ老の猿智惠^{さるちゑ}、二人の娘が念晴^{ねんぱ}し、死骸をお見せ下されと心^{こころ}のせけど落付てわるびれもせぬ有様^{うりょう}、女ながらも奥ゆかし、城之助取あへず、也免^{まん}なる立寄^{たちよ}て見分致せど聞よりはや、二人の娘飛立風情^{よひぜい}母押^{おし}とシめ^まば馬の先^へ勿論^{もろろん}義理^{ぎり}、よつて命を捨るゝ武士のならひ、万^よ一夫の死骸^{しがい}とて見苦^{くさ}うあひてまいぞ二人ながら氣を失づめ立寄死骸首のなき手足の色^{いろ}のかみわる計り也、姉も妹も氣を失づめ立寄死骸首のなき手足の色^{いろ}のかれどもかへらぬ家の矢はづの紋、仕立し衣裳^{いしゃう}、妹が目印^{めい}、かなしや

姉あね、是は我夫おつの六郎殿ろくろうでん、玄やほいのすとれくと引直ひきただし、見れば衣裳紋いしゃうもん所ほんそふ玄やまいかよと、姉あねがさわげり妹わいわい狂亂きょうらんかも様是め我夫おつ玄や、姉あね是は我妻じやと死骸しがいをゆすり立つるつうろたへ歎なげけべ母親おやぢものびあがりてへさしのぞきすかして見てへ猶ひすり寄よ飛と付程ふぢゆ氣きいせけれど、以前の詞こと身みを耻はずてせきのぼる氣きを撫なでふろしす、コリヤ妹わいわい最前さいぜん方がたも云い聞きせ玄まいの爰こゝ事こと、刃とよかしる侍しは兼あわての本もと望むね驚おどろく事ことじやお玄まいやらぬ、あれ歴ひきとも見てござなさるしばしたなし、見苦くさし、母おや耻はずよといひつしも、立た寄からだ骸からだ押直おしのし心こころを付つる腰こしの物もの、取上とりあ見みれば大助だいすけが指替さし替也よこへいかよと密ひそか内うちを改かれば、鯉口迄こいのくちも玄まいといし血の、扱つかひ大助だいすけ六郎ろくろうを討うて己おのが刀と指替さし替立たのきしとひ思おもへ共とも是これ迎むかも姉あねが賀おめでとやせんかくやと胸むねの内うち、千々ちぢぢと乱まるし計ひ也よ、慈悲じみふかき時頼公ときより不便ふびんと思おもひ顔色がほんいろ、一座いざの諸士しよしと誰だ有あて批判ひせん付つる人ひとなきよ、氣きづよく生うれし城じゆ之助のすけちつ共とも玄まいほれずまか、呵かる親おや

もほへ頬づらに前まへも恐れず見苦くさい、原田の家いえの代々だいだいの弓頭、武藝ぶげいを云立いふたて知行ちぎょう頂戴とうだい。二合半にわんじやくのげす下郎しやうろうも、武士士の祿ろくをばむ内うちに分相應ぶんあいよの器量きりょう有あ、たゞへ鬼神きじんなれば迎相手むかひあてよかすり疵きずもあふせず、やみくと首くび打うれし六郎ろくろう、屢たびねけといひふか知行ちぎょう盜人ぬすびひと不忠者ふちゆうしゃ、武士士の風上かざあがみも置おきれぬ大たへけ、涙なみだかくるもいまくし死骸しがいをくれる早歸はやかへれとあいそなくもねめ付つられ母おやぢむつとせき上あがて、おこがまじや義景殿ぎけいどん互ひ名乘なまのりぬき合あせ切きつきられつ、數ヶ所いくわしょの疵きずもあふせるならばやみく討うれし侍しを腰こしぬけと異名ゐめいせば源みなもとの義朝ぎせう公平治こうへいじの軍ぐんも打負うひながら、長田ながたも首くびなせ討うれし、近くナサバ實朝さねせう公、公曉こうあといひし法師ぼうしが爲ため、落命らくめい有あし例たと、云いみ及およべす皆みな存あじ、天下あひだの有名將めいゆうじょうもだますみ手てなしといふたとへ、六郎ろくろうも若盛名さかめい乘のりかけ勝負かぶせば、討うるゝ運きわみ極きわみ共ともびんさきでもそきかねふか、たゞかられだまし切きとたんの間ま、一刀ひとてつ討うれし時の無念むねんさを推量すいりょうして、評誕ひやうでんあれ人ひと

人とほ前も人めも打忘れ歎き志づめべ兄弟も共々泣入計也城之助猶
ゑせ笑ひ汝がいふ義朝實朝は兩所へ討たる者眼前六郎への相手なけ
れば武士の大死誰を目當み敵を討ん女房有ても是も腰ぬけ知行盜人
といひしが誤かとせりかけられて猶せき上^國敵あければ大死とな、六
郎も狂氣はせまいし敵がなふて叶ふか其敵^{ハナ}それ、それとい
へど云かぬる詞のはしのいぶかしく姉も妹も傍よりかく様爰へ大
事の場所敵忘れねば大死との^{ハシ}詞死骸の耻先祖へ對して不忠
不義女なれ共我よも武士の娘露程成共手がしりあらべ敵討せて下さ
れど取付勧けば道理く敵は母が立つたるぞ討せてやらんと聞よ
り嬉しく妹が身がまへテ其敵^ハいづくの誰名^ハ何と申す^國誰と
外ならず、姉のつれあひ弓削大助^ミ、それは誠か眞實かと仰天すれば姉
は恸^{ハラハラ}り是母様おまへは狂氣か血まよふてか一家といひあい聾手^カよか

け給ふ様になし、さへいへ慥な證據べし、有ての事かと尋れば、云まじき
と思へ共、知行盜人恩恵らずとの一言悪事千里、つゝんで詮なく云聞す
人とも聞しめせ、姊聟の大助腕かたまらぬ的場のそれ矢、將軍のほ鷹を
射殺し、其罪科輕からずと禁籠せしは五年以前、然るゝ去る年將軍宣下
のほ祝儀、數多の籠者に赦免の折柄、大助事に評讐の上切腹又極りしを、
心よからぬ泰村公命乞のほ訴訟、叶へば叶ふ先知迄も恙なく、命の恩と
泰村公へ取入俄の出頭、妹聟の六郎兼貫安からぬ事と思ひ、或日我家よ
て大助と密談し、當代賢人と呼れ賜ふ時頼公へは近寄ず、肝曲邪僻の泰
村公へ取入給ふは心へずと、底深き疑ひ、大助が耳もねつてつ、それより
あい聟中よからず、互もふくむ胸の劍、中も立身の氣のどくさきのふ鷹
狩のほ供、是非一人はとめんとい思へ共、主命といひ役義のほ供けふの
今迄立歸らず、事こそと胸も釘討てのきしの聟の大助、遙行先を案せ

しが、血の付たる刀を捨。さしかへ置しが、慥な證據、何科有て國遠せふ、兼て中のよからぬも兄弟共、又覺が有ふ、大死亥たといひれて、名字が汚るゝ悲しさ。母の口から聾の訴人赦してたもやと計みて、姉又ひつしといだき付聲も、おします泣ぬたる、姉も妹も聞え付覺有身の因果と因果、妹の松世目を押ぬぐいに前より向ひ細く、細 やよ及ばず、様子には聞遊べす通一家ながらも夫の敵討で、女の道たゞす、也赦免願ひ奉ると、思ひ込んでぞいひ上る、姉の幾世の亥ほくと妹の願ひ尤ながら、姉が身よりも成て見や、現在の夫見遁して討されうか、大助殿のかへり自が手をさげる、了簡してたも妹と説く詞の先打折頭、さもしい姉を人も聞身え成かれらば、自が心、何と有ふとおもひ亥やんす、二世かけし夫を殺され泣かずゐるをよい心と思ふてかいの、あい聾討て立のく程の比興者、かばふおまへの心が見へる、未練未然 えござると恥しむれば、未練共比興共、笑

ハレ笑へいりやいへ、かれひし夫の命乞、千万無量一億の劍の山のくげ
んでも、かれられふならかへりたい、慈悲も情も外はない、佛の救ひうけ
ず共、妹の恩の忘れまい、姉もほう乞やと思へず共、八万江河のうろくす
を一度も放す万行と、思ふて赦してたるものと、くどき立々泣て詫す
る心根を思ひやりつゝ母親も、せいする人も諸共ももらひ涙もくれぬ
ける、時頼心をいため給ひ、双方論議尤ながら、姉の幾世とやら能合點せ
よ、上下万民の隔なく、人を殺せば其人を召捕、急度刑罰も行、天下の捉た
とへ妹が夫の敵ねらはず共、そもそも安穩も置べきか、一國一郡の主たり共、
大死せば國郡を取上其一家國境よりあほうばらひ改め云聞すも及ば
ず原田の家代々忠臣の家筋、子孫のたへんを不便も思ひ城之助が愚
言も、敵を討せん詞の裏、恨とばし思ふな、妹の敵を討て家を立よ、姉が義
心も據なし、共も立越、夫の先度を見届立歸れ、討もうたるも前世の惡

行誰をか恨みん、兄弟あらそふ事あかれと云なだめ、扱母よ尋べき子細
有兄弟別るゝ敵味方、姉をめぐみて一味するや、又妹が後見し大助を討
するや、心底いかゞと有けれど、尤のひ尋ね、兄弟玄のきをけづる中、姉
を見捨、妹が味方恩ひも寄ず、是幾世、數ならぬ共母が後見、大助よ廻り合
共やみく妹よ討そふか、氣づよふ思やといふを聞かね城之助ア思ひ
がけなき母の口上、アタ优有者との共よ天をいたゞかざる道理、眼前夫を殺
されし妹、不便と思ひ付そふ筈非道の大助が味方し姉をめぐむ不所存、
義理志らず道志らずと、かさみかけてきめ付る、姉の幾世おとあしく、母
様のふ志は有がたけれ共、人殺しの女房よ組遊ばしてハ共よ科人、妹よ
一味して、敵を討て下さんせむごい共つらい共、恨ハさらく殘らぬと
取付歎カサハ、母親はま、おとなしい事いふ人々、兄弟詠る梅櫻、いづれの花が
よくからん理も非もしつた自が、姉の非道よ組するも、義理をしつたる

故ぞかし、お上より存じなく道しらずとのほしかり、妹がうらみる心
根もいひねど聞ねど身よこたへ、胸よこたへる一通り恥かしながら聞
てたべ、自同が夫刑部左衛門弓矢の家は正八幡のかでなければ叶ひじと、
鶴が岡への日参、或日下向の歸るよ稚子の泣聲立寄見れば女ながらい
やしからぬ生れ付、ひろい歸りて自よ見せ、幸家よ世續なし未々は入聟
取家の柱と樂しみて蝶よ花よと寵愛し、そだて上たゞ姉の幾世、其後よ
殊をもうけ程あく夫よおくれてより西と東よ月見る心、いづれよおろ
かなき内同、義理のかしるゝ姉娘、ひろい子といふ事をたがいふとなく
人もしり、我も志つたゞおのづからなさぬ中との入すみを、他人がいれ
ていひさがす口惜や耻かしや、我心よはへだてねど人の口は天の口、わ
けて大事と身をつゝしみ廿三年が其間、心の苦勞同いか計此度姉の聟
大助、六郎をうつたるゝ善よもせよ悪よもせよ、さし當ては非義非道、妹

よ一味して敵を討ひ順の道、道とへ立つて組せぬは、まさかの時はひろ
い子の尾が顯られたといわれて、是迄つくせし眞實が、五石の塗うるしと蟹かに
の足むそくと成が悲亥かなさみ、妹を捨て姉あねとつゝく、義理よつながる身の上
を恨てたもるな妹いもはふしん有な人ひとと老の涕なみだのくれの雨、姉あねが身み立
む春雨はるあめを、ひとつようける妹いもが晴はれてもながす夕立の雨ゆ、涕なみだのまざりけ
る、時頼かんしん淺からず、あつばれけなげ成老母おとなしおの。昔唐土周の世うち、魯國
と戰たたかふ事こと有、一人の匹婦ひつよ二才の子こを捨すて、十才の子こをつれ走はし周の軍師ぐんしとら
へていへく、十才こにつれず共ともよげん、小人びのを捨て飢死う、貧女ひんじょ涕なみだくくれ
て捨すて亥いの我子わがこなり、つれ行は繼つづ子こ成なと答こた、軍師ぐんし魯王ろくおうの政道せいどう美うつくなる故ゆゑと思
ひ軍ぐんをおさめ歸きりしと聞き、今天子將軍の政事せいじ正ただしき故ゆゑ汝汝如ごきも道みちを立
義ぎを立たて、肉身にくじんわけし娘むすめを捨すて、繼つづ子この姉あねをめぐむ心底じんてかんじても猶ゆあまり
有思うしひくの望みのぞみよませ吉日よしのゑらび立たててゆべし、萬事まんじの勝手かつたるべ

しと仰を請て親子三人かなひよ立て見合せば涕は六ツの目よたまる
心のたるみ引立んと母ハ俄よしわり聲ヤア妹大助ハ大敵、女の小腕覺束
あし討覺ラウガシバし有かく、松世ハツ心付死骸の刀脇狹鯉口ちやんと打なら
し愚オロカよひ母カミ夫の敵大助カヒサ大出合時ハシマツ大將出立、腰のかけすへ車切因果
りめぐると覺しめせシテいざぎよし頼もし姉の刀の刃ハサ向ハタキ何モ負ミケ玄カスと
腸指腰ハラシハシよばつ込ヒムクふ尋シテ及べき大助殿ヒツそふて向ハタキふ目當ハタチの拜ハガみ打
花の盛ヨコウの落花狼籍散ハラハラセキセキして見せんと勇むを見て、それよくでかすく
兄弟共よいさみがついた母カミもおくれじヤアおぶやとひつたてしゆくお
やと子のなげきりよそよ

○道行くまがへ笠

ゑのびねをいつしらべたる事もなき、親子三人跡ハシや先、三つの歌口吹ハラフ
ろふ姿サガタも、そろふくまがへの笠カコかたふけし腰ヒダつきは、男なりけり長ヨロシがた

な。さしぐしかうがい授捨ゆけすてて握わけがみのかた思ひ母と姉との行過る、
妹の跡あさがりはを、吹野嵐のあらの身みよどしむ。夫故身おとこをば、捨小舟すてこふねいづくを
さして行ぞ共ともしらぬやみぢの、ほし月夜、鎌倉山を迷まよひ出みだ都みやこの方ほう人立
の有あと計けいを聞傳ききつたへ、急いそげとはかのゆかざるい、姫ひめごせ旅たびのたびはべきわ
らぢのひものとくくと、とくよとかれぬ我われ、一ひとが袖そでよも涙なみだ、こゆるぎ
の、里さとをはなれて兄弟いとこの、獨ひとりつままを助すけんと思ひつめたるおもひつけん念力ねんりきの神かみ
いのりつ佛ぶつみちかひ、かけてぞたのむあしがら山、箱根はこねの權現ごんげん是ぜとかや、
妹わいの夫おとこの敵あだをばうつの山さんべと聞からよられし悲かなしさ取とよ、取とみだし
たる中なかくよ先まへ廻まわりて母おやしの、腰こしをかゝへつ手てをとれべふいとふり
きる浦風うらかぜよ、もすそはらくはろくと、きじも泣なみだば討うながれまじ討うながつ討
れつまゆら道みちよ生うれ、來くるは武士ぶしの身みの成せい果ごを三保みはのうら、松まつとしきか
ば、又またもやと三人さん三さんつつ立た別べれ顔ほと顔ほ見みふりの、袖そでよもあまる涙

が淵さめへ時雨もろ共みなき顔かくす夕亥ほよ姉のそれどん氣も
つかず松世が袖よ取ついて見かけてたのむよ豈あまりそなたれ曲も
ない。今のもとある、めもと今ハ田もやう畦もやうよからへ志
んきくをうきしまのはらからなれど他人むき、他人ませずの中山よ、
むけんのかねのおどきこゆゑよ行む宏やうのかねのこゑじやくめつ、
るらくとひくなり、妻子珍寶及王位けんぞく牛馬多けれど魂中有え、
入ぬればひとつも隨ふ物ぞなき、此時誰をか頼べき其苦を誰がたすく
べきだ。願ひく地藏そん迷ひを助賜られとふしおがみ濱名の橋の
橋ばしらあべ川よしだ岡崎女郎衆なるとあらずとなるみがた鹽のひ
かたよ遠江あつたの明神らいはいしくはあの渡しかぢ枕ゆめふどろ
かすさめがひよおひその森のかゝみ出くもりはれまを松本の里のわ
ちはよ一ふしき吹て聞さば其人よ早近江路よ打出のはま辻古よしと

妹は心いそく磯の浪姉ひいそがぬ旅あれど空とふかりと、諸共よ跡
よなりよしさきもよしつれて、みやこよつきよける花の都は、王城の草
木もなびく、夏座敷三浦彈正吉村と人も心を奥の間よ、琴の爪音けたか
きり秘藏娘の千草姫、くみやは歌を引習ふ調子も、高く名も高くまだ十
三の花の顔つぼみから見る風情なり、いつ取次の隙もなく飛脚と見へ
て足輕の大小さしが門外よ物もふ頼ませふと呼へるこゑ、とふれ
とつり罷が手をこまねいて出向ふ、拙者ハ鎌倉若狭の前司泰村が家來、
返翰の書通持參や、役用あらべ旅宿よ相待、役苦勞あがらば取次、頼み存
るくと狀箱渡し歸りける、請取内もあひくは奴も亥つた泰村の内
通、上書よんで打うなづき、やつたり取たり筆まめなせんさくと、つぶや
き内よ入よける世を忍ぶ笠の亥め緒を引しめて、敵をねらふ妹よ計さ
じとする母と姉男出立のこむ憎よ、心のふしの數とへば思ふ思ひハニ

つ三つ五つと六つの歌口を、忘めてゆるめて三人が心揃ひぬ笛竹の中
よあしらふ母木の、鶴の巣籠吹そらし、虛無僧修行梵論くどほうし
やの門よ立並ぶ千草姫はちん座敷障子ひらひて出給へば、つきの
龜中居も耳そべ立中よも秋野のうわき者何と尺八も面白いじやない
か、お姫様の琴よ合せ、鹿踊が聞たい、よびこもふでに有まいかといへば、
中居の主ながおきやく、此間鎌倉からのお客様子有ていかふお忍び、
且那様も他所の者出入無用との云付、それ共よ姫君様のお心次第ぢや、
そふれ覺し召れずやといへど聞たき下心、千草の前も笛竹を聞いておば
しひうさがらし、苦しからずと有ければ、秋野の嬉しくんぐくお年がいか
いでも胸がひろい幸ふ客も未明から、何方へやら乗物でお出、留主事よ
よびましよど、立てちよこく門よ立出、是ヲ修行者、自が頬のふだお方
笛のお望、あなたへとあしらへばげよ此方よも足休め、お案内と打つ

れて、内へ伴ひ入よける、姫君の志とやかみ、恩ひ合たる修行人、いづくから何方へのお通りぞ、餘りやさしき笛の音ふ聞とれてまねきしと、挨拶あれば年かさのこむ僧取あへず、心有げなは詞、國は關東鎌倉者、上方見物三人同行、旅は道づれお情ふ預たし、なふいづれもとそこくよ取つくろへハ二人共いかぬもそうと、詞數、いはすいはせぬ有様は、一くせ、有と見へよける、必共は氣もつかず、何かなしよ一竹所望氣がせける、お姫尼は琴遊ばせ早ふ始てながくと、長歌あらべ、小夜衣櫻づくしもよからうと、さはぐ間近き一間より、父彈正吉村鎌倉者と聞ふ付、もし時頼の廻し者油斷ならずと先ぐとは底持足のふみどなく、襷押明立出る、常ならぬ顔きみわるく今迄いさみしめも、姫もまじめ手をすれば、三人の猶氣のどくの笠かたふける有様みいと、うさんのかしるうへ男とや思ひけん、態と眼と角を立、婦人門入時は、其家よいらずとり己をつゝ

しむ詞、一飯を受飢を凌乞食同前の修行者なせ内へ入た娘殊々鎌倉者
と有、早くいなせ頬をかくすは猶心へず、虛無僧嫌だ尺八いやだ、彈正吉
村が座敷片時も叶ひぬ出てうせふとはつたとみらむ目の内は鏡の内
と満月の影を寫せしへとく也、望有身の危を遁れ出んと思へ共、鎌倉者
を除心底心へずと、三人一所よ手をつかへ、女中の中へ我々が遠慮もな
しよ参りし、男對せし身でなく共よ女の國修行、不審有など笠と
れば六十よ近き姥櫻二人も共よ八重一重、今を盛の傍の花も實も有姿
あり彈正面をやはらげ、扱ひ旅の女中よな然らば何故男よやつし虚
無僧の姿、子細ぞあらん、とふかく成程、不審は尤もと我よは
鎌倉生れ、津の國大もの浦よ玄るべ有尋参る道すがら山賊野伏の見
めをいとひ、男の姿よ身をやつし、是迄参り侍ふと、誠玄やかよ答ける、彈
正は胸さつぱり聞へた出來た、女の才覺く、次の二人は老母の娘かう

よい器量^{きりょう}拵見事^{ごうみじ}、上方^{かみがた}よりも稀^{まれ}ものと、姉^{あね}又見^みられる懸^{けん}衣^ぎ、思ひまししくし氣^き
をうばしれ、思はず側^{そば}又立寄^{たちより}て、旅やつれ又身もやせず、むつちりと心地^{こころぢ}よい大もつへゆつくりと一日路^や、二三日も逗留^{とどろ}して都も見物、我も妻^{まご}えおくれてよりねやさびし、今宵からしつぼりと夜と共^{とも}酒盛^{さけ}、懸^{けん}は心^{こころ}の誠のもと思ひこんだが鮓鱺^{いわしうなぎ}是姉^{あね}、年寄^{とねり}、嫌い^{いや}いか^い、顔ふるへどふよ
く、肌見^{はだ}よと手をさすを、ひんとしられて、又うちく、あたりを見て、猫^{ねこ}がおき、ちよといらふて、ちやつと引^ひ顔^{かほ}み似合^{あは}ぬ憶病^{おもひびやう}、人かみ犬が赤^{あか}貝^{かい}をなぶりかしるよとならん、千草^{せんそう}も母も氣のとくの折わるければよ
そと見る、姉は立のきむつとせし、顔^{かほ}もみじの歯^はみきぬきせず、年^{とし}そよれ我子も見る前^{まへ}じきも作法^{さくほう}もしらぬ侍、女計^{めんけい}とあなどつて、か自^{まづ}は夫有^{おつ}、小身なれ共^{とも}鎌倉^{かまくら}みて何がしといはんとすれば、是姉龜^{あねうさぎ}相^{あわ}千万^{まんぜん}、いふてよければ母^{おや}が名乘^{なのる}以前^{まへ}以前^{まへ}、今^{いま}まづしき虛無僧^{きむそう}、何事も旅の

至堪忍の身の薬、妹それく長居するで事起る、母を立、姉をさきへくと、立て行を彈正。是く玄バしと立ふさがり、かたくろしいに遠慮と思ひ有やうは空事、心よされつて迷惑幸、鎌倉より客も有、一夜留て一竹で饗應たらし、たとへほれたが實でも見らるゝ通の年寄口計で奥はお留主、かうやも座興の内、人よしられた身も侍、非義非道を致ふか氣遣有など口よへりつば心よは、今宵忍びて姉娘、我手よ入んどほんならうの老をおこすぞ道ならぬ、心玄らねゝ三人も、詞よめでし立とまり、一宿へ致さず共、お茶のお世話と應答べ、爰は端近妙共、お茶が數寄ならかこひへ同道駆走アセ、ひらみくといざなれ次の「一間」入よける、彈正娘の千種をちかく呼寄、鎌倉よりの書通を取出し、娘悦べ、今日ハ吉事有て、思ひぬ機嫌戯言をいひしも、旅人の心見ん爲といひくろめ若狭の前司泰村公よりの返簡讀聞せんと押ひらき、彌當月上旬北條時頼を討亡

す評誕、謙倉松葉が谷^はにて會合いたし、攝河泉の武士をかたらひ、密^{ひそか}に下向有べく、本望達し、はゞ、望の如く西三十三ヶ國相違なく、一弓削大助、かくまひ置れし段神妙^{じんめう}み、一味同心の者^よて、間、万事^ゆ合さるべく、一頼置^い、錦の^は節詮議^{せんぎ}つよく、間、油斷^{ゆだん}有間敷^{あるま}し、次をよまんとする所を姫^ひ押^おとめ、コレヤとも様正^{さま}しくそれ^れ謀叛^{むほん}の企^{くわだて}、おまへ^一味遊^{みを}ばせし、かき、様子^{ようしょ}玄^{くら}ね^ね、^ペ驚尤^{おどろき}我先祖^{わがそ}三浦^{さん}の義盛^{ぎせい}北條時政^{ひとき}が爲^よ家滅^{めつ}せり、それより我^わも牢^{らう}くの体^{たい}となり、剩^{あまつ}へ一人の乳^{ちの}呑^の子女^こなれば足手^{あしお}まどひと里^{さと}み遣^{つか}へし、つてを以て泰村^{たいそん}又取入^{とりいり}、將軍の^{じめ}がね^ぬ依て次第^{じぢ}立身^{りっしん}、其後^{おご}おとを産^{うぶ}で妻^{まご}、相果^{あいかわ}十三年母^{おや}なし、そだてしも、皆泰村公の^じ恩^{おん}、恩^{おん}を戴^{たまひ}て恩^{おん}を玄^{くら}ね^ね、鬼畜^{きちく}をとる親^{おやぢ}がわるい事^{こと}ハせぬ、何^{なん}も云^ふな聞^きぬ、追付^{おづ}客^きの弓削大助^{のりのもの}乗^の物^{もの}で歸^かられ、夕飯^{ゆふはん}の拵^{こしらへ}万事^よ心^{こころ}をくべり、^{ことわり}共^{とも}よいひ付^{つけ}めざ、いきやく、我^{われ}又謙倉への書^き状^{じよう}、近

國への廻文心しづかよ認めん、あなかしこ人なかれ、誰もなかれと中の間の襖^{ふすま}押明^{あつけ}入^いよける、風の吹みも耳そべ立^{し立}、始終^{しぢゆう}聞取妹の松世、母と姉との目を忍びそろりくとぬけ出て、夫の敵大助を、かくまひ置しとい天のあたへと伏おがみ、今や歸るかもふくるかと門迄走り東を詠め、はんがく巴^{ともへ}が鬼形^{きぎやう}の熱^{いきほひ}、一心念力と^いきしや遙^{はるか}見ゆるびやう乗物^{のりもの}すばやと思ひ門の陰身をちやめてぞ忍びぬる、右も左もさしつむる忍び乗物四枚がた、歩行も手振も内證客門より内へかきこめば隠持たる松世が抜身^{ぬき}思ひがけなき刀の稻妻^{いわづ}驚く下部が憶病^{おもびやう}、六尺九尺一足^{どん}よ飛^はで逃^{にげ}散計也、此おどよ驚きて幾世も母もかけ出る、妹は姉を目かざし立^{し立}、助太刀ならば跡の勝負、乗物^{のりもの}よ近付て怪我遊^{がわらう}ばすなど聲かくる、最前より亭主の影言^{かげこと}、廻^{まわ}も遁れぬ夫^{おつ}の命かべふで^ハないよ^ハ聞^きや、今大助殿殺^{じゆ}してれおれも死ぬるそなたも助けぬ、母様獨^{ひとり}が一本立^{たて}爰を思ふて今一

應思案へないか妹と。今のの場所も手をすりて詫るを聞す是姉を此場
で何のくり事もふ叶はねとかくとしてのいてござれといひ放し。比
怯者の弓削大助、おとが手みかけ討たる六郎兼貫かねづらが女房、夫の敵出て勝
負ど、扉とびらくはらりと引ばづせば、侍と聲かけぬつと出たる侍の、妹智の六
郎兼貫マアこりやどうぞや、いかよ、是はと三人左右よ立ひつりよりもきよ
ろーと十方失ふ計也。六郎ちつ共動からうせま、お久ひや母人おふじん、こじうとめ女
房めいぼう珍めずらしき對面たいめんと落付おちつけ程猶胸むね晴はれす、あきれて母おふじんの側そばよう寄よ思ひがけなや
六郎、ふことハ大助おほすけ又また討うれ其爲そのための敵討てきとう、存命おのまへたは不思議ふしきぎいぶかしさよと
有あけれど、成程なるべく不審ふしん尤至極よしこ、其六郎そのろくろうを見みへし死骸しへいこそ、まがいもなき大
助おほすけよ、かくやては合點がてんゆくまじ、子細こざい語かたつて聞せきせやさん、去鷹狩たかがりのお共兩人ふたり
同道墓田村はかたよて大助某そのをまねき、一旦ひとときの誤ちがひよて禁籠きんろうせし折りから若狹わかさの
前司泰村まきじの情きようよ依よて命助めいすけかる、然るよ泰村叛逆ほんぎやくの企くわだて、將軍宗尊公むねむねを討う

てくれよと密の頼悪事といしりながら命助かりし大恩の報せん爲今
日遠矢又射奉る契約されいへ日本の大將現在の主君天命何と遁れん
とどつしおいつの思案とり一腹切て相果るに安けれ共泰村へ恩も
報せず功もあくむだ死してハ未來の迷ひせめて人手よかられバ戰場
みて討死も同前さすれば命の恩も立功も立義も立汝が手よかけ我首
討よ違背せバ將軍を討奉る何とくと刀を拔て我よつき付のつびき
させぬ大介が詞義理よつまつて是非なく其刀を以て不便ながら大助
は此六郎が首討たり其後首を草村又隠し衣類をぬきかへ刀を證據よ
残し大介が我を討たる体よもてなし此國へ入込し心れ天下の重寶錦
のほ節くれよ失て行方しれず此家のあるじ彈正泰村又頼まれ盜取た
る由大助が最期の忠言是究竟と我名を弓削大助と改め泰村一味と心
歎させ奪ひとらん謀計神八幡此詞よ相違なしうたがひ賜ふな人よそ

語る間、姉が身がまへ太刀抜そばめつゝ立あがり、夫の敵原田六郎
のがさじ勝負と聲かかる。さすがに女性得心で討れたる大助、殊々最
期の砌弓削大助と名乗入てめよとの教、本望を達する迄の大事の命料
簡あれといへ共聞すいや／＼眼前の敵何の赦そふ、勝負をするか切
かけよかどせきよせいたる有様を見る。悲しく妹の松世夫を覆立ふ
さがり是姉母理のこうじたれ非の一ぱいで詫かへす、悪口もよが口も
やら腹立の捨詞、すげなふ云て今後悔かうならふとの夢よもしらす、い
ふた詞の數よが耻かしい、お腹が立て理ながら、目の前で殺そふとい、あ
んまりむごい姉様、母とも共くよ詫して下され、手を合すおがみま
す、此世よないと思ひしよ今逢た時の嬉しさ、方よ年の壽命と祝ふて
ぬるわしが氣よ成ても見てくだされと、夫よすがり地よたれ悲しみ
餘る涙よ、あてる刃のはもまはりなま金よ成計也、姉も涙のこぼるれ

と氣づよくも聞入れず、何と殊思しつたか、時頼公の前に前といひ爰迄つきそひ、今の今迄^{わが}のたらへ百万たられ口たしかせ、聞ぬそなたの心のむござ、其方もそつち此^{こちら}方も此^{こちら}方^アのいて討しや、さあくとふり上かしれべ、あぶないく、あぶなかのきや、のいたらおまへ切氣であら、愚^{おろか}やされた事そんならわしも一所^{ひと}と夫のからだを大井川、水の出べの姉が氣は渡^{わた}せ渡さぬ命がけ、胸はごろたのながれ足、ふみとめかねて見へよける、母へ見るよもくるしみの悲^{かな}しさつらさよ思案を極^{きわめ}用意の剣ぬくより早くのぞみくつとつき立たり、是れと驚六郎兄弟は猶うろたへて、母を狂氣か是はまあ悲しい事と取付て、泣出す聲押とめ、かしましく、母が氣い慥^{たしか}あぞ、うろたへな、二人の娘、聾^{ろう}殿^殿云ふ事有と息をつき、ナフ恐ろしきは人心嗜^{たじかむ}へきは邪天^{よつけん}又兩眼なきと心へ後ぐらき我性念、耻しあがらさんげよ明す、何をかくそふ姉の幾世^{いくせ}のひろい子、鶴が

岡の松原より女龍男龍の鉄形を添、二つの年より捨有しをよし有人の胤と
さとりひろい取てそだて上、廿五のけふが日まで、拳一つ杖一つ妹よ當
ても姉よ見せぬ、なさぬ中の義理立たぬ心一ぱいのふつくらうた義
理といふ物いまさかの時はしけやすい此度妹が敵討、姉が味方と口よ
はいへど手柄よ討かしくと姉の歎へ何共恩はず、高名よして家つが
そ、首とらしてほめさせよと思ひし心へいれねど悪心天道赦し給へず、
眞綿よ包針の先直よむくふた妹が身のうへ手柄はせいで今わがの託言、姉
が身ならべ赦そふか比興者めとしか付、道立てして討すハ治定、それ
よ引かへ託をする、妹の心がかれいさ悲しさ油の鍋でいり付られ、あび
大乗の釜庭よ焼付らるし我苦、今迄姉を大切よかれいがつたハ義理計、
心實底からかはいひは、血をわけたより外よ有ふかせめて此身を敵と
思ひ、姉の手よかけ切成共、突成共、心よいらばすんドよきさんなり

共腹をいて妹聟を助てたも、女ハ五障、三従とて、五つと三つの難も有、わ
けて此身ハ恩愛の子よまよふ故義理もかけ、道もかけたる科より、め
いどの道を引渡され、一百三十六地獄の掟と成此母を不便と思ひ只一
言、妹聟を助るといふて臨終さしてたも、手が合せたいふがみたい、迷ふ
へいのとかきくれて涙のせとのかたお浪岸よ、打込哀れさよ、幾世は傍
々手をつかへ、自を捨子とはうそか誠か乞らぬ共何よもせよ此年月そ
だてられたる親子の中、自害せず共其譯を聞いていあ共やまい實の親は
見ずしらず、夫よ別れおまへよはなれ、妹よ敵對何の手柄、松世爰へと手
を取て、共よ介抱くと心とけてもとけやらぬ涙の氷ぞはりつむる、六
郎目を泣はらし、某が命をかばい思はずも生害、生よ世よの恩何と
報せん、是よ女房泣す共に禮ヤセ、
あいとはいへと聲振ひ、冥加ない、母
様、有がたふて悲しうて胸の内がはりさける、お慈非ハ忘れぬくと、泣

玄ほるれば目をひらき母おやより禮れいとひまだ苦くるをさせらるか、姉あねこそい命みことの親おや、兄弟中なかよふとひ吊ひぶらひ、獨ひとりかけてもうけぬぞよ、六郎松世むつろうまつせを頼たのむ、姉あね不便ふべんがつてたもやもふお迎むかひ玄げんやもふ行ゆくぞ、さらばくの引息ひきいきもねふれる、ごとく絶たたはてたり、兄弟わがわいすがり付つぶ、取乱あがれしたる有様うりょうを共ともみ泣入なきいり六郎心こころよへくて叶かなじと二人を引立ひきだ、油斷ゆだんの所ところであし、此家の主彈正吉村じとうじよしむらが首くび取とて、はな節せつを奪だつひ取り鎌倉への見みやげやげみせん、我われ續つづいて切き込めと、三人一一所ひと身みづくろひ、かけ入はいんとする所ところ、一間の内うち聲高こゑたかく三浦彈正吉村みうらじとうじよしむら是これみ有あと、障子じょうじくらりと引放ひきはなし、弓矢ゆうしたづさへ様先ようせんみ踊出おどりだ、弓削ゆうせつ大助だいすけとは僞誠いつせいの原田六郎はらたむつろうよな、泰村公ときむらこう我性念じやうねんを見み込こ預置よちれし錦にしきの節せつ、うべひどらんとい不敵ふてき、暫しばの情おもえ穩ひん便びんで立歸たきらば見みのがし、さもなくば胴腹どうぱくよ風間かざまを開あけ、修羅しゆらの奴やつとなしてくれん、但ただしは降參かがさんして味方みがたよ成なや、いかよくと呼よへつたり、六郎むつろうも飛道具と心こころおかれて待また、はな坂さか

逆謀叛の天下を奪ふ大望、一人の小敵と弓矢を以て射とめんといひ比興、よしれも運づく、がんがやうの勝負互の矢先と決せんそれ女房ハット心へかけありし、弓をふろせば姉幾世、かぶら矢取て手とわたしかたづをのんでひかへる。彈正ゑせ笑ひ、數多の家來と云付討取は安けれ共、某が首をねらうが志ほらしさひきめを以て逃るなら逃次第とおどしの弓矢、互と矢先の勝負といこざかしき不敵者、望なれべいで一矢と息の根とめん、そふいふ己をいやうぬをと詞たゞかひ弓弦を志めし三浦の家のもとしげ藤音と聞へしつよ弓引原田代と弓矢の譽、矢聲をかけ合やあくと引しほりたる有様はまけいしゆらとべらもんの矢先諱ふ如く也、見るよ危、兄弟が中と立てられあなたへ廻り、彈正が矢面をふさいつのいつちらくと、ちらめくよやくるいけん、矢弦はづれて庭と飛是れと驚其隙と、六郎が弦音高く切てはなせばあやまたず、彈正

が胸板かけ様柱よんばしら又射込さるこしは、釘かすがいで打付うちつけしひらた蜘蛛アシダラ見る如く也、三人の心地よく、いで首とらんと立寄よせを、同暫待まつどてたべ、少の間と押おさとおさめ、娘千種よろづ早ふくはやくと呼出す、何事と走はして出見れば父の様柱よんばしら又白羽の矢やみてぬい付あわせられ朱あかみそみたる其風情ふぜい、悲しや誰仕業ながし、敵は誰だれぞとと、様ようとあせれば彈正たんじょう娘むすめさりやな、かく成は我かくご、敵てきないと心へよと、聞きて泣なぐさ出す娘より、始はじみかゝる詞ことわを聞六郎ろくろうあざ笑わざわざひヤア比興ひけいの一言、善心よしよ立歸たちかへりても命みこと助けぬ、いふ事あらば早くくはやくはやさすがに若者故心ゆゑが付す、最前汝おの又射さかけし矢の正脉ただいみよといふいふ氣きを付、取上とりあみればはいかよ、矢がらはわれて矢の根もなく、案山子あんさんし又持すはま弓の子供こどもたらしよとならず、何なんと見られしか六郎ろくろう今更善心よしよう猶立歸たちかへらす、我先祖わがそ三浦の一黨いとう北條家あだ又仇有家筋あだ當家とうけいを亡なきさんと工たくみし、武士の魂たま惡事あくじごよて惡事あくじごよあらす、口惜くち惜や其魂たまが犬猫けんねこの性念せいねんよ成たる故此仕合しご、其子細ほそり、

始終老母の物語とつくりと聞、それ成幾世とやら、鶴が岡松原の捨子とあ、
女龍男龍の鍔形を添捨たる親へ此彈正吉村、聞て悔尤ゝ、最前顔みるよ
り我子とい思ひも寄す、テよき女房、又有まじきと思ひ付より、恥かしや
あい玄やくの心放れず、今宵忍ひて枕をかへし、一生夫妻のかたらひを
せんと思ふ、煩腦是則畜生道も落入たる同前、せめて當家又弓を引、あだ
矢成共放しなば先祖へ對して一つの孝、汝が矢先をかつて謀叛人と呼
れ、武士の數も入たき望いか又前業前罪報へばとて、我乎としらで心を
迷ひず淺ましき根性、本望を達する事ハ扱置億万劫をふる共、人性もま
じひる事も叶ひじと、思ひ切ての自滅ぞや、娘千種よふ間あれあの幾世
こそ現在の姉、父か死たり共孝行みせよ、不便や便が有まいと、思へバ骨
身がくだくるくと、目顔をしかめ身をふるひし、まぶたで拂ふ涙の玉
石を飛すが如くみて目もあてられぬ次第也、千種ハ涙の隙よりも姉を

有とは兼てより、聞て懲しく思ひしよしたふかひなき父の身の上、あはぬがましで有た物、天よも地よもひとりの親、今宵別れてあすよりは、誰を頼でとく様と宮仕せん姉泡のふ、矢をぬいてお命を助てたべさり迎い、心づよやとかきくれてすがり泣入計也、幾世へいとせき上げ愚の事をいふ人や、矢をぬかば忽よお命は絶はてん、日本國の罪科が、我獨み報ふのか、夫よ別れて程もあく、父母二人を同じ日の同じ時よ殺すどり、因果もめぐれべ此様よ一度よまひつてくる物か、眼前よ親共しらず敵と思ひ、矢を取やりしは自が射殺したるも同前、敵はわれじやニ千種、早ふ殺してくと、手を取かれし顔見合せ歎沈めべ側よ立、夫婦も共よくり出す、涙の雨は白山の雪もとけ行ばかり也、彈正懷中より一巻を投出ししそれこそハ天下の重寶錦のみ節、望よまかせ進上す、其かわりよ娘千草を頼み入、謀叛人の娘なれば縊組ハ勿論、家相續思ひもよらず、乞食非

人みなならぬやう、こもかぶらせて下さるあ不便みござる、只娘が事偏み
偏み、千種よ父がさまを見よ、たとへ町人百姓も稼せたり共、一心が乱る
るど、ニリヤ此やうも木の空の住居、見苦からふがな、今の悲しみを忘れず、六
郎殿を兄と頼、松世殿を姉と頼、幾世を母と思ひ、ほ夫婦も見限られぬや
う見放してくださるな、心よかしるは是計お暇アさらば／＼さらば／＼
の聲の内からだしごけば矢がらは残り、白羽そまつて紅の血煙立て亥
してんける、兄弟泣たをれ、松世も共よもらひ泣、六郎引立／＼泣て歸
らぬ愛別離苦、善心起れば悪心止、一心させられハ佛心同成佛とくだつ疑
ひなし、歎ハ愚智といさめられ姉が涙ハ父と母、二つよ分る玄ゆみ大海、
妹が心にてし親のあきがらよりもうらめしき、矢がらのあとをあがめ
やりもどればともよ六郎夫婦、おもひかるゝりんゑのくるまむじや
うの風みさされで親は西方極樂へ我は鎌倉東路又歸る、涙の雨の空、

しほりくへて漸と都の空をぞ立よける

○第四

江の島の神よ願ひをかけまくも、かしこき國の守りとて民の願ひはさまよの、筆よつくして繪ようつし、繪馬の數く、かけならべ狩野の筆やら土佐の筆流を繪師がさいく書、其品よいはれねど武家の、願ひに鏑矢を板よはさみて弓勢を、ふしむふし鳥夫婦中からぬ松の若みどり子を持人わらひ小夜更て夜なきふどしの鬼女おとのめん、お乳の願ひは乳を出してしほる所を書しるし、おのが願ひの品よを、繪ようつす故江の嶋と名付し、物と疑はる貴賤願主の其中よ天下の執事相摸守時頼公の思ひ者、玉豊姫と名付し、則ほ家の古柱二階堂道秀が一人娘、主のおねまの伽の隙けふ江の島の神もふで、下馬からあゆむ道草やお供の廻下女婢まつわらかごを放れしひよ鳥の林よ遊ぶ風情よてさしめき合てつきしたふ。

女中ふさへ佐野の源藤太常景別當役の實盛も墨をとべした髭男、花
よつるれば自ら人も詠る鬼百合の咲そこないし如く也、又向ふみも咲
花の三十餘る女房へ時頼公の家老職秋田城之助義景の寐やのとも、
花卷といふ辭舌者少しく引つれて神前近く行かしり玉豊姫を見る
よりもいき繕ふて待るたる此方もそうと早見付姫君立寄まわら珍しの内
内方同住家の友千鳥かくと聞ならざそひ合道の名所も詠んみ残多や
と有けれど花卷へ取あへず、有がたき仰やな秋の木のはもちりぐ
ふ風景もなき折からみほ參詣どり一しほみ神もお嬉しかるらんと取
繕へべ源藤太城之助殿の内證共覺ぬ口上、秋の紅葉、鹿の泣聲、虫の
音を聞樂風景なきどりやされず、此所で暫くの遊覽、是々妙衆いづ
れもつれ立後堂から奥の院見物あれと心を付下部も持す數物の千里
見晴らす神前へ神もゆるさせ給ふべし、姫君の志とやかみ人の心の數

くの、一つよ限らぬ物ながらいか成願ひで参詣ぞ、聞まほしやと有ければ花巻のゑしやくして、ほ主人時頼様より月と花とを二つ雙べほ世繼の有やうと、東のお部や、月小夜様西のお部や、玉豊様おまへの事よ、ふたりの内、お種がやどると則ほ前様との極どふ遊ばす事じややらふそい事やと待かねて幸此お社の妙恩天女様といふ女神、ほ先祖へ三つ鱗の旗を給へり、子孫の榮を守らんとのほちかひ、姫君様達もお胤がやどるやう、残が有なら自よも給へれかしと、子胤を誂え参詣正眞の君を思ふも身を思ふでござりやんすとかたりける源藤太、經景生れ付てのそこぬけ柄杓、遠慮ゑしやくもない男、花巻殿、ほ世繼の願ひあらほ參詣、及ぬ事、同じやう、隠し包まるれ共、月小夜君よりほ懷胎と慥な取沙汰、二階堂道秀の頼み依て、無量山傳通院の僧正より、變生男子の守り札差上しと聞、さればこつちの姫君の日陰、唉くひさごの如

く、我々迄も鼻はなひつ玄くろやり無念類むねんるいもない事と歎たんから出る傍若無人ぼうじやくむじんうちら
問かしれば花卷はなまき、是これへ源藤太經景共いのりいるしむ方ほうの仰共覺おのこくす、ど
ちらへでもお胤おひつねがやどるどめでたいといふ物、殊こと月小夜様つきよよしやう大内方だいないの
お息女おきじょ様子ようしょ有てまあおてかけ分くわら位位といひ筋目すじめといひいやしからぬほ
方ほう、若君様わかみやう誕生たんじやう有ならば鎌倉中の悦えきひ賑にぎわひ、そふそふ思おもし召めしれずや
と、何心なく云詞姬君ことことひの耳みみ又釘くわら、むつむつとしたるほ顔付がほつきほ家老いえろうの内儀うちぎ
月小夜君つきよよし、公家の娘むすめで高位たか位自じの武家の娘むすめでいやしいといふ事か、高ふ
ても下さふても時頼様ときよりやうのお妾おわらわ、慮外りよがいながら月小夜殿つきよよしだいのかた持もつて武家ぶけを
さみしてくださんな、聞きよくいお内儀うちぎと以よの外成ほかせいほ機嫌きげんを負うけていぬ花
卷はなまきがけらく笑わらひわらひ、おかしかつた事がお氣おきよさよさいた月小夜様つきよよしやうの
お身持みもちなどふ有かしらぬ共ともそふく、噂うそがないでもなし、筋目すじめも位位も
いふが有やうせん先さきこざるしがいやならば身持みもちとふから成なやうう梶かじの

取やう腰のふりやう、かれいがりよがうすふてへ必後手の成てから悔
で返らぬチ、志んき氣のとく様やと云ければ源藤太の能折よきひずからとそり
やほ内儀忘れた事の、いつぞやより時頼公、月小夜姫のお部や通ひ晝夜の
わからちなく、べつたりどるくさりお子がとまらいて何とせう、生ぬ先さきか
ら泡瀬あわせの守札しゆさつとあんまり、朝から晩までほつかいで水遊び、お寐間の
内うちのべ紙で富士の山のが出来たと掃除番そうじばんが物語けづか結構けつこうある事の、まだ其上
又月小夜君此玉豊君を妬ねたまそねみなき物ものとせうなど、密ひそかに談合だんが有共聞
は笑止わらひなれ姫君おいとこうて猶者めの涙がこぼるこぼると焼付やきつける火
の燃もぐいと油あぶらをのせて見せかくる、只一筋の玉豊姫常つねさへ思ふ嬢妬じうとうの
道穂みちほと顯あらわれるしもみぢばの色好いろどりするねたましやと、思ふ心のやるせな
く是花卷はなまきげふの參り月つきさよのほ産うぶの祈いのか帶請おびよか、そふとさながら
いれぬ故脇わざわきへすべらず心こころのさもしさ、けいはくと追従ついとうと袖そでの下したで勵

めるか坊主よくめだけさ迄よくい夫のためを思ひやるなら、あかしや
くとせり給へば、扱もつべこべくとよふおつしやるの、じつたら
しつたとやさいで、おまへよ何の遠慮せう、今でこそお妾様きのふけ
ふ迄二階堂殿の娘ほ、詞も互よたいはい、時頼様のお床をよびすを大き
な顔で鼻はなみかけ、爲ためみなろうの成まいのといちつと詞が餘あまりましよ、月
小夜様が懷胎くわいたいなら何とせうと思うてぞ、片腹かたはらいたるお臍おへそがよれる、に臺
様さまよ成たふても邪よみよあられぬ物、よもしいとい爰の事と、齒はみきぬき
せず云かへす、猶もせき立玉豊姫むらひとひめ推參すいさんな花卷、戀うらぎよへだてが有ふか品しな
よつたら邪よでも、時頼様の本妻おとめよ成た時よ何とする、ま、うならぬ事く、
水みずはよかよまよながれす日ひ西から出だぬ例横たてよこ車をおそうといや
しいよもしいみれんな心、但しこ親ほ二階堂殿の云付か、様よう様ようを付、ど
ふ遊あそべせこふ遊あそべせ付上うり、花卷はなまきとふじやこふじやが常からちつと

むやくしい月さよ様の有内へ云過し入ぬ物、時頼様をたぶらかし文
彌ぶしでこゝしても、は臺と云天井うらよんでもござるがつらよくいふ
んすんでかしで當世へいかぬ物でござんすと、心有たけいひ仕廻私し
やお暇じゆげります。緩ゆるど跡で何なり其一人事でもは意なされ、經景殿も隨分
又聞出して、焼付やきつけ、聞出して、焼付、まだ其上を吹付ておかまのわれぬ
用心と、云ちらしてぞ歸りける。云伏せられて姫君へ無念口惜腹立と、思
ふかんばせ目みうかみ涙なきだつ。先立計也、源藤太折よしとあたりを見廻し、神
前よかけ置し鬼女のめん、是幸と引ふろし袂たもと、隠かくしふ傍そば、は無
念むなみござりましよ、月さよ姫の懷胎くわいたと、づく聞共明すに始はじさつする
所花卷あざまきがぞゑざい云も頼手が有てぬかすと相見へたり、爰をよふ合點がてん
遊あそせ懷胎くわいたすれば忽本妻、月さよ、先こされ生ながらへてもござられ
まい、迎むかも死べき命なら月さよとさしちがへ、さすがは武士の娘じやと

ほめらるしが死後の面目に思案遊ばせ姫君とそやしかくれば、それ
それ何面目よ自が命あがらへいられふぞ花巻めが思ふ手前も頬にく
しもとより月さよ戀の仇常からねたましくと思ふ心よいやましの、
懷妊したとい聞も恨めし腹立や我一念があるならべ安穩でおかふか
と俄よ面色さめて眼血べしる嫉妬の顔色アシスましたと源藤太明左程
よ思し召ならべ扇が谷の藪垣を某が切破りに通ひ路の隠れ道月さよ
が閨ちかく忍び込み此面ようす衣めしよなくおどさせ給ひなば恐
れわなしを病死キムシいたれた事折能べつき殺しても大事ない誰仕業とも
知れぬやう仕やうは様ヨウ、是よこしたる事なしと彼鬼女の面手ハセみ渡せ
バ姫君嬉しく是究竟藤壺の一念よに息所の嫉妬を合よくしと思ふ月
さよを取殺さいでふこふか南無江の島辨才天力をそへてたび給へ此
面則我正体願ひを叶へ給へやと伏ふがみく經景つゝけと小踊オモリしや

かなをさして行末をふかく切りて、扇が谷時頼公の妾人月小夜姫のは
懷胎二階堂がはからひよてふかくつむ其上より近き比よりは所勞へ
物恐れするは病体心氣の痛かん乞やくの業と計み心得て四物湯又ヒ
加減黃芪白朮木香の功立事によな／＼異形の姿目ようかみ、絶入給
ふぞ不思議成、お部や預る二階堂信濃之介道秀年の功とてそこ／＼
心を付て今晚ハ、お伽よかれる寐すの番いねむる役の妙、こはひ親仁
が目の玉を囉いぬ様立廻る、勝手口より天文の博士ト部の定久参り
そつと取つひで二階堂が傍近く畏り仰み隨ひ易の表考しよ、月さよ君
のほ病体の疾姑の恨うけさせ給ひ、正氣をうばはれ給ふと疑ひなし、某
讐名の法を以ては祈禱仕る上猶よ邪鬼を拂ふ妙術景房が教し讐の画
裝束に寐所よかけおかば邪鬼近寄事叶はず、則持參致せしと、箱又納て
指出す、二階堂悦喜の詞太儀／＼左も有べき事、隨分は祈念頼入は本復

の後、急度返禮アさんと博士をかへし是より廻中定久が數の如く此箱の内成隣の面裝束お寐間又かぎり、お薬又も氣を付、お咄でも致されよ、ねむたそふな顔付と、玄かる下地又廻婢撰もく此間は物のけをあきまるた、わざら又付た物の毛は、そるかぬくかでついさつぱり、けもけよるとつぶやきて、皆よ一間又入よける、秋田城之介義景、は病氣のお見舞と、一間又通れば二階堂出向ひ、是へく義景、夜又入てのは見廻り、いざ是へどもてなしける、城之介座又直り、は見舞は付た是切の尋なれ共又といふ、此間時頼様、二三ヶ月もお部や通ひあき故人づての取沙汰、月さよ様のは病氣、近き頃は内證はは懷胎の月重り、早五月の帶なされしとお耳又立左程めでたき品、隠密又する二階堂が心腹心へすとは疑ひふかく密又參て吟味致せとの意、披露延引の誤は某が取なす、何どは懷胎で有ふがなど尋れは二階堂くつくと吹出し、又尋るか貴殿も

貴殿、そなれどく上、鎌倉中ふれながす、主人よお妾二人有り何の爲、代續を望むでないか、月小夜姫ハ長袖の娘玉豊姫ハ此二階堂が娘、どちらよても胤おとこがやどるに前様めでたいよめでたいを重かさねるゝ何のつしまふ、そふでないぞや、けもない事と取合す城之介ハ先達て慥たしかよそふとしつたれ共、ふかくつしむりこいつしれ者、ひとつらへ腕捻上うでねじ上げ、云せ見んと身がまへし立かしりしがいやくくく、あら立てハ猶云まじすかして聞んと打とけ顔おもて、そりや二階堂おくふかい、お身と我どり、日頃懇切きんせついふたら大事か、つしむ心の底意そこひどふじやあかせくとだまし込うず、何よもいふ事をりない、ふりいりぬな、よしくいはすばいわせやふ有と刀追取立上りしが思ひ直むすびして又立寄よせて見せても根ねも葉はもあい隠かくすと思へば猶聞よきたい能のうも悪敷あくしゆも一味して、日本國にほんこくでも春合點、世續よつが有てじやまならば、おれよまかせと段々だんがのぼしかけたる

檀梯子、二階堂なら落てたもけがひさせぬとじやれかしる、信濃之介道秀ちつ共乱だれず、上手ごかしゆ懷胎をいはせて聞んといわ愚く、元も跡方もない雜説、某が隠すと思ひ所存の底をさがすのか、一味とい何の事、詞が餘るといひ放す、義景たまらず膝立なし、最前よりばかりくら一生み覺ぬ、鼻毛でくるまきの水かへる、汝が性念見ん爲、懷胎の様子にしかもほ男子左を司とつて有とほ手醫者の道雲が白状聽しつゝ、むれ大きあ工み時頼の胤をたち、此お家を呑ふといふ心底見定て此僉議是よも返答有かくと詰かけられて二階堂、テはつと計よ十面作り、五臓みながすひや汙れ鉄の湯玉を大椎よりながしかくるとあらず、奥より必走り出月さよ様のほ出といふよ是非なく城の介睨付てぞひかへゆる、月さよ姫の病の床間近ければ聞づらく、障子ひらきて起給ひ、城之介待てたも自が懷胎を隠すと有て疑ひ、二階堂より此身みれ猶

百倍と思はるゝ月又七日の不定日も病又依ておさへられ、思ひ違ひも
有あらひ、時頼公のふ心ば無自がよくからふ、それが悲嘆い耻か恥い道
秀よも此身よも少も悪氣ない事をわかれて聞せん一間へと呼込給へ
バ城之介おめす億せす立あがり、ニ階堂聞た上みてたゞいなぬ、人
の目をくらまかず國賊、首取て主人への土産みする、待ておれと睨付奥
へ通れば月さよも障子引立給ふよぞもしや明させ給ふかと心ひ奥の
物音をそろりくくとさし足し立聞したる身の科は三すくぼむ土より
も五尺の骸をちゝめゐる俄よさゝゞ妙婢走り出、やく道秀様月さよ
様のほ病氣いつものごとくほなやみ早ほ出と呼立る折もよし幸と引
つれ奥へ「伴ひ行時もたがへず丑みつの秋風さむく身よしむも、嫉妬の
念の晴やらず忍び来るは玉豊姫よな／＼ごとよ恐ろしき姿かれば
心もかはり、經景がたき付の胸よ懸立ほむらの煩腦、月小夜が懷胎どり

ねたましや恨めしや人ハそれぞといき白絹鬼女の面をかくし持あたり、見廻し首尾よしと姿をかへる邪鬼の形、庭のたまとのせん水ミズ、うつす姿ハ我身からぞつと身の毛も忽ハシタ、穂ハシタあらひるし糸薄菊の玄ハシタげみをつたひ行ハシタ、つもる恨のかずハシタくを、いつかはらさん今宵の内ハシタ、思ひしらせん思ひしれ持たる劍は無明の利劍ハシタ、左ハシタの炎ハシタめうくハシタのねつとう湯玉ハシタ成てどろくくハシタ、どつと吹たる風ハシタつれ、庭の木草ハシタのざハシタり立中ハシタをわけまよふ逢ハシタ見ハシタし時ハシタわれならで、枕ハシタは外ハシタよかれさじといひしも今ハシタあだ浪ハシタの水ミズ、うつろふ月ハシタ小夜ハシタがなじみハシタ逢ハシタおそ咲ハシタの菊ハシタの實ハシタはへの種ハシタ残すハシタ腹立ハシタや恨めしや我一念のつきそひて、あんおんならじやどり木ハシタを突ハシタつらぬいて切やぶり、此世ハシタをさらば我獨ハシタ思ひ思ひれ思ひのかづら亂髮ハシタはらくくハシタ、彼橋姫ハシタの怨念ハシタも是ハシタより過ハシタじと恐ろし、恐れ恐るハシタ、小車ハシタの回ハシタる因果ハシタいくるりくるくハシタくるしき此身ハシタ

誰故ぞ、あの女故なす業と思へばいとゞ頬よくや、よくやくの内おほ
ひ、かづきし面の其儘、生れ付たる二つの角、おのれと動如くみて我身
も、あされこへいかよ、取ふどられずぬけと放れぬ執念の鳴動するぞ淺
ましき、是非もあや口惜や、我傍へかゝる共思ふ夫よいかへらじまけ
じまのあたりを、よらみまゝして忍び入、一間のこなたとすみて、ほつ
とついたる一息は、くれゑんの如く見へよける嬉しや今宵も仕あふせ
し、此寐やこそ月さよが病の床の夢まくら、只一刀よ突殺し恨を晴さ
ん思ひしれど、小踊して飛かしり障子々はらりと引放せば内よ不思議
や異形の姿、山神顯れ給ふよぞ我身忘れて身の毛立、思へずあとへたぢ
たぢく立寄程猶つきしとひ遡るも遡さず追廻る、玉豊姫は是迄よ心を
つくせし恨の刃さまたげなさべ諸共と突かくればかいくゞり、あなた
をつけばこなたへ廻りかげろふいなづま水の月手よまゝらねば證方

なくそこよ、爰よとさまよふ所を、さゝうて腕取てはつたとけたをし、乘かゝ
れば玉豊姫、無念くと身をあせる。何の無念外道めど、山神面を取けれ
ば、二階堂道秀也、玉豊はつと驚おどろき、父上か恥かしやと消入計き見へけれ
ば、二階堂目をむき出し、父おやぢとれ誰事、鬼女おにめよ近付もたぬ、玉豊といふ娘一
人有たれ共、天下の賢人時頼公けんじんへ指上今いまの修臺所同前そもしき、嫉うらの心
さげるやつよあらず、定て狐狸こりの化なまごしないア正体顯せと、態なまとそれと
ハ知りあがら、逃のがべ逃のがさん心の底引ひきふこし突放つきぱせば、玉豊姫ひめの猶ゆうさか立
是これども様、狐狸こりとハふろか、よくしと思ふ一念の惡鬼あくきと成ても不思議で
有まい、月さよが懷胎いはいをうそじやく偽いつばりじやと、五月の帶する迄までぬつ
くりとかくしてじやの、其上うちト部の定久さだひさといふ博士はくを頼み、此玉豊を
呪のふとい、あんまりむごいどうよくじや、観でなけれど恨うらみもあれ共、元の
おこりの月小夜姫、取殺とりごさいでおこふかと思ふ心ではづかもしや、おどし

よ着たる此面が執念ふかくこりかたまり、取ついて放れ得ず、昔の宇治の橋姫よ、あいもかららぬ我身の上、胸は炎の火の車、燃立時は四十四の、骨がみぢんよくだくる苦月さよさへ殺すれば心も晴て少は助る、見のがして下されど、女心の一筋又歎涙の血みそより二重の目よりもれ出る、思愛不便と父親も、涙をうかめ側より面に手をかけ引ても押ても放れぬ、いかみと聞た時より又悔、あきれてとんと腰もぬけ、さりいへふしきと撫まへす、城之助義景、月さよ君のほ病氣で様子の聞ず、何でも己道秀めを引とらへ、いはせて聞んと立出しが、あやしき姿と二階堂、指向ひの体心へすと障子のかげよ窺ひるる、二階堂が心にくらやみ娘を取て引寄、いかさま子を見る事親よ玄かすといよく云た物、母よおくれてより手玄ほよかけばるか幼少の時より、物妬する根性、一生止まじと今よ心歎さず、此度月よ君懷胎と聞べ、娘の念つよく成、いかなる

仇か仕出さん、万一事有て、お家の亂れ、誕生有迄、隱密月小夜君
へも吹込己獨ひとり、よかくさん爲、主人時頼公を始鎌倉中へふかくつゝむ、其
事ことのえらず某が惡心うじきでも有かど、城之助がねぶかき疑ひ、さまでの惡
言國賊こくぞくと迄名付しかど、我子わこが嫉しつふかき故ゆゑ隠すといいれず口をとぢ、
勘忍かんにんせし時のつらさ、竹鋸たけのこぎりで背骨せねを挽ひき、五体ごたいをやげんでふろす苦其かん
なんを凌しおり何の爲なぜ皆是己が不便ふべんさかいいは、五人七人子こどもを持ても、思ひ
の同じ事ことと聞きましてふたりとあらばこそ、日本國にほんこくを尋ても、親獨ひとり子獨ひとりか
けがへもなき己が骸生かせいながら鬼女きめのめと成此世の親へ思ひをかけ、未來の
母おやしへどの頼よりさげてあはふと思ふ、不孝者ふこうしゃめ恩おんしらずめ、心こころをなをし性
念おもひを入かへ、誤ちよまえたとぬかしたら、天道のめぐみでもとの人間ひとみんと成事
も有ふ、淺あさましや耻はずかしやと拳こぶしを握いざな、身みをふるひ鬼おによ教化けうげの親の慈悲じみ
釋迦じやか又經きよより有がたら、あなたよ忍ぶ城之助、子細こまごを開ひらて胸むねも晴子はれを特

人の嘸ミセあらんと思ひやりつゝもらひ泣玉豊姫ヒロヒメの悲しさのますみ付て
もいとゞ猶志んゐの邪鬼ニヤキば放れぬす、どゞ様のほ詞、無理とハサラく
思はね共、女のりんき嫉シツキとハ夫ハフがかいひくと、思ひつもぞて其うへ
が、かうじくハサラてかう成あらひ赦ヨルして下され思ひ切事ハシマシどふもならぬ、も
ふ此妻チカヅ成上ハサマの耻ハラも耻辱ハラフも恩ハシマケも情ハシマケも思ひゆこそ只一筋ハシマツ月ハツさよを殺
して胸ハサハがはらしたい異見ハタケンも何ハナも聞ませぬと、立て行ハシマスを後ハシマシよりがんづ
かつかんハサマで打たハサムをし、玄ハシマやうこりもない畜生ハシマシウめ、ふ胤ハシマツやどりし月ハツさよ様
己ハシマ指ハシマでもさハシマそふか、動ハシマシいたら一討ハシマツと、刀の柄ハシマカと手ハシマハをかくれべ玉豊ヒロヒメ
なをり迎ハシマシも此世で本望達ハシマツする事ハシマツ叶ハシマツまい、一念の毒蛇ハシマジラと成しめ殺す
ぞ月ハツさよ姫ハシマツとハシマ様、いさぎよふお手ハシマハかしりませふ、さあく殺して
くと首ハシマさ玄ハシマ出せば、よいかくハシマ生て置ては末代ハシマの耻ハラさらし眼前ハシマの
仇討ハシマシてくれんと刀ハシマカを抜ハシマス振ハシマス上ハサマたれ共、いかよお家の爲ハシマやとて天ハシマ

も地ひぢよりも獨ひとりの娘、一筋ひとすじ亦心から嫉しづもふこる邪鬼じやきもふかい鬼おによ成ても我子わがこじやものあへなく殺す親おやしも鬼おに、おみと鬼おにとが親子おやこと成、共とも因果いんごをさらすかと思ひ廻せば手てもふるひあなたへ廻まわこなたへ立たつ、うろりくとうろたへるはとほりせめてあはれなり、城之介じょうのすけも悲しみよかくれるも打忘うちなつれ、までと聲こゑかけ立出だきだつれは、驚おどき二階堂にかいどう娘むすめを覆立おひらだつふさがる、まかくする道理ぢのうと側そばよ寄よせかりよも主人時頼ときよりのお手てのかよりし女めの娘むすめとは云ながらいハト主筋しゆきん、一念發起はつきの心こころあらば、己おのと面おもても獨ひとりとれん今いま、一異見いちよみして見よふとい思はぬかと、心こころを付つくれば、扱あつかは様子さま聞れしな傍輩はたばのよしみを思ひ、志過分しときふく、助すくくる筋すじも有あふかと様さま思案おもかも異見いちよみもすれ共とも、何なんをいふても頬ほは此こざま勿論むろん心こころもなをらす、殺すより、外仕様ほかわざもなし、片輪かたわえ成たら猶かひいひ、不便ふべんよか玄まことやると目めをこすり、逆さかもたすけぬと思ひながら、心こころが殘のこてみれんの涙なみだ、必ひさみしてたもんなどいひつゝも、又玄まことぼり

出すよし／＼思ひ切たぞサ今ぞと既さで又かふよと見へし所よ、やれ暫く
とほ聲高たかくいづくよりかハ時頼公、忍び入せ給ふみやほ出あれバ月小
夜姫、奥より走り出給ひ玉豊包を殺しては、自女じめの道たゞす助てたもと
ほ涙かこちながらまの給へ、時頼公悔喜くわいきの詞詞事を定るゝハ七度我身
をこらすといふたとへと思ひ二階堂が心腹しんぶを見定ん爲密ひそかニ忍び様子
を聞、娘むすめをあれむ心底尤おほさも有べし城之助が忠節ちゅうせつの疑ひ、月小夜が貞
心各道を守る志ほらしさ、玉豊とよが嫉うらも直成心ただなれより起る、我二人の妾しやくを立
る故、かしるふしきを眼前まへん見るも一つハ菩提ぼつの種たね、心を晴させもとの
人間ひとになしくれんとほもといを押切おし給たまへバ人ひと是こと驚おどろく内、玉豊
姫の頭かしらにかけ、右手を合させ給ひつゝ以大神通方便いだいじんつうぱん力、勿令墮さし在諸惡趣
と唱となへ給へば王豊も時頼公の姿すがた見るより執念しじねん晴はれたり共とも又唱となふる
佛力ぶつ又、肉付にくおひし鬼き女の面おもて落おちればもとの玉豊姫生返いきかへりたる其心地そのこころぢ各

ふしきをなしよける、二階堂も悦びの中々悲しき姿、皆よはつとふしきづみ消入、計々見へければ、おろかや旁何をか歎我多年の望有政道私なきといへ共邪智非道の輩多く死罪々合ひ何千人責一人よ歸すといへば是時頼が誤也、諸國を廻り非を正し善をすゝむる旅出立必名殘おしむべからず、月さよが胎内の子をもりたて、二階堂城之助心を合せ國を守り、不日又泰村を亡すべしと仰も重き其中玉豊姫は是迄と父の刀を取と早自害と見へしを、城之助押とめ、是はいかよとせいすれば、恥かしや我姿、鬼女の形と成し身の人々面が合されよか、月さよへの云わけど、ふり切を時頼公立寄て刀もぎ取煩惱即菩提心と、亂れし髪を切すて給ひ命たもつハ孝の道、出家又成ハ貞女の道、貞孝禪尼と法名せよ、時頼は今日より最明寺道崇と名を改ほめぐみ、二階堂悦び涙悲しみハ月さよ姫、胎内の子の三つ五つ十迄共やまいほどよりと取すがり歎

よつるゝ城之介二階堂尼禪尼東の内をはかくれば時節を待ては出と
取付缺とゞむる袖ふり放しつきたをし世の中をいたふまでこそかた
からめかりのやどりを何をしむらんげゝ人間の一生は岸のひたいの
ねなし草、つながぬ舟のいたづらよこがるゝも旅たふも旅今行先も
法の旅浮世を出る發心門、ひらくる花やさとりの門、いぎやう門行なん
ぎやう門、くわん念門を打越て天台廿四門有、くう門ひぐうやくくう門、
末は西方東極樂、どうもんちうじんてんぱうのみだのほ國へ急ぐ身ぞ、
なむあみだ佛なむあみだ佛の聲、計ゑてわかれ行

○第五

竹園の種を分、柳陰の路を挿み、以て相陽の天よ參給ふ、征夷大將軍宗尊
親王は治世を乱さんと、謀叛の企安からぬ泰村が軍勢催促、と既に顯れ
て、一族多年恩顧の者都合其勢五千餘騎兼て用意の館城乱杭逆茂木お

びたゝ數兵糧運べせ立籠る、是を早く攻べき由將軍職の命より、二階堂道秀城之助義景兩大將與力の軍勢二千餘騎、塔の辻々陣を取軍の評定區々也城之助ニ階堂又打向ひ、敵の大將泰村ハ年來將軍を亡して、天下をうばふ逆徒なれば、將軍の所大事故當年三才の天女君、二心なき諸大名、屬傍守護し奉る、我ハ此寄手として、其勢わづか二千餘騎、敵泰村ハ五千餘騎、され共味方の諸軍勢、命をからく、義をふもく、其名をふしむ人となれバ、一舉々勝負せんとすれど、一圓城より討て出ず、種々敵を悪口すれど中より呼引出されず、鹿忽々攻べ小勢の味方人を失ふのみならんと、いふようなづくニ階堂寡々衆よかたずと承れ敵の大勢成事ハ年來謀叛の其印、味方の小勢ハ俄といひ、大將軍を諸國よ志めず錦の辻はたなき故、勝劣いかに有べしと、諸人のあやぶむ故ぞかし、とよかく夜討み討とらんと、各地勢を窺ふ所よ黃色なる蝶満々と、一つよかた

まりばつと散涌が如く又飛形勢、抑いか成前表ぞと軍兵驚怪しめべ
かくと見るより兩大將麾追取て詞を摘要でたし旁いさむべし、昔もか
かる例有承平の政門も天喜の頃の貞任も逆心おこす其印又此黃成蝶
多く飛終又本意を遂ずして悉く亡ぼさるされば逆徒の泰村を退治疑
ひなき前表と味方の心を引立る軍師の心ぞたくましき、武士一騎かけ
来るハ原田の六郎兼貫也、珍らしやほ兩人、某ほたを尋ねん爲種々
又心をつくせし所弓削大助が惡心發起、ほばたを盜持し者彈正吉村と
よく教首さしのべて討れし間則大助と成て入込、彈正を射殺して取返
したる錦のはた、今軍中へとさし上れば、軍兵彌色をまし、兩大將大々悦
び、此ほはたが有からひ最早敵又勝たる心地、直又攻んど魚鱗鶴翼三軍
備をなす所よ暫しくと呼ひりて破紙子又破れ笠、ぬげバ器量ハよし
有はま、某の先年討れて相果し、そのレ兵衛政經が憚、同名源左衛門經世

とナ者、部屋住よて有し故に存じはよも有まじ親佐野の兵衛討れたる
其時分、某の前の將軍頼嗣卿の供よ加へられ在京の留主の内所領の
伯父の源藤太、うべひ取て寄付す敵を討て参れとナ、某女房兄弟共見ぐ
るしく尾羽打からし、敵を尋ねへば親の兵衛を討たるハ源藤太と沙汰
承る、所領押領致せしも旁以て思ひあたる様子を窺ひし所、泰村謀叛よ
源藤太も一味の由人手よかけてハ一分立す、あはれ先陣許されなバ、生
前の恩と計、孝行ふかき紙子の袖、ちぎりハ親子の上ぞなき、二階堂聞
届、謀叛人の張本は、若狭の前司泰村なれば、敵の實否をよく糾し藤太ハ
其方討取べしと、情のふかきものとふよ草ものべふす山ふろし錦の
はたへんぼんとひるがへるを見るよりも、思慮なく欲よ頼まれし城中
の軍兵共、あれ見よみしきのはたり、將軍方よ有物を、泰村方よ有と聞
かくしみせしりあつたら命、かうさんしてたすからんとぬけくこそ

こそかふとをぬき大半味方と頭をさぐれば城之介是を見てヤ汝ら先年佐野の兵衛を討し者城中より有と聞くまつすぐみナならば命をたすけ功よりつてほうびをくれんといふ内よりも何が扱、やさいでなんとせふ佐野の兵衛の源藤太が討て捨られひど聞もあへず源左衛門、扱乙そかたきの源藤太^{かたけ}やうれしやなのきばかりかたぶく家やどより武具馬具の用意もあれど時をはづさべうつ事あらじ紙子は則ちよろひはらまき、べくやがつるぎも心より有將軍家の先陣^前の佐野の源左衛門經世なりと呼はる聲と諸共より味方は鯨波をぞあげみけるかたきの大將前司泰村副將^{のし}の源藤太櫓のうへ立ならび中より泰村大音上某今迄討て出ぬを比興者よと雜言^{ざん}せし將軍方の鼠輩^{そばい}共耳をすましてたしかみ聞彈正吉村^{よしむら}錦のはたをかくさせ置今兩方よりよせありし一とみうつてすてん爲彈正を待たる所より思ひもよらずみしきのはたかたき

又立しを見るよりも、心がはりし味方のやつべら、いひがひなきもの何
よかせん、某正五位下ミツノミツノよせられて、數ヶ國莊園ヨウエン數千町、此ちぎやうを
たらすとして、天下をのぞむ泰村がきやつべらも手ハシふろさす、ナ源藤
太タケ、けちらせと下知すれば、承てかけ出る、其ひまよ佐野の源左衛門經世、
よろひ一領拜領し、一陣アソブよおどり出アツバケン、アケルでうれしや伯父者人、親兵衛
を討たる事心よおぼへ有つらん、かたきやらぬとうちかけられ、心へた
りとうけあがし、まつかうわれよどきりかくるを、經世ひらいて源藤太
が右のほうほねきりつけて、ためむところをつゝとより草すりあげて
一かたな、引ぬいて首かきおどし、乱れし髪とも引つかみ、血祭カミツリの神軍神、
紙子が手がらとほめよける、泰村が郎等タケムラガロ、大野軍八オノノイチからへかね、軍勢引
ぐし討て出る經世討アシタタフすなかけ合せと、兩大將の下知より、原田六郎是
よ有アリと、真先マササキおめいてかより、たゞ一もみよと切まくる、原田が太刀風

皆ちりぐかしるうきめよ大野の軍八、原田が刃みうちこうされ今
是非あく大將泰村、眼の四角八角よ、八尺あまりの櫻の棒、うちだてなぎ
たてわつて入爰を先途とたしかふよ、粲然としてあたりをはらひ近
づく者もなきところよ、城之助大手をひろげ、うちかくる棒ひきくどり
しつかどどらへてねぢあふうちひだりのわきより二階堂、どつたと聲
かけ蹴たをして高手小手よいましむる、兩大將聲を上謀反の張本泰村
を、暫時の間よ生捕たり、勝時く同音の軍勢忠義を輝す、鎌倉將軍宗尊
のほ所をとさしてぞ「急ぎける

○女はちの木

行衛定めぬ道あれば、く、こしかたもいづくならまし、是れ一所不^い住の
沙門みてし我此程の信濃の國よひひしがあまりよ雪ふかく成し程よ
先此度の鎌倉よのぼり、せんよこもり春よ成修行よ出べやと思ひひ、

やどりもがなと夕がほのそれよりあらぬ小家の軒たる木まばらよか
たふきし雪折竹のあげすとや主ひん女と思しきが年も三五の玉は
ばきひさしの雪をかきあとしふとせばゑりよ袖口よ首筋もとよひや
くくづつめたやと手をふくも下主ぢかふしてなをやさし最明寺殿
まがきみたすみやくお女郎越後より下總のだんりんへ通る所化
の僧今日の大雪先へも跡へも參りがたしすの子のはしよ只一夜頼み
ますると有ければおやすいとながら主のるすよ私がどめまするも
いかりありわきをお頼なされませおいとし様やとあいきやう有トキタ主
のゐるすとけ扱ひこなたに内衆かい名く主はわたしが姉聟此頃
他國いたされて主といふ姉ヨウ然ればこなたも主同前江口の君が
かりの宿よ心とむなどやたれ、それの色あるやさ法師すみのわれか木
のはしかといふやうな此坊主色事の用心ならべ氣遣有などの給へば

娘もよつこと打笑ひ尤色といふ物へ、みめかたちとへ云ながらどふや
ら時はづみでい、鼻そげでもいぐちでも、油斷がならぬと走りこひ天
下をさばくほ身とも、此返答は行暮てたゞみ「給ふぞ殊勝なる世の中
に、何か經世が留主住居、妻へ手足が土大根蕪ゑぐなもつみ持て、歸る山
路の白たへよ、^ノふつたる雪かあいかよ世よ有人のさぞ面白ふ見給ふら
ん、それ雪へ鵝毛^が似て飛でさんらんし、人は鶴氅^{かくしゆう}を着て立て徘徊すと
いへり、されば今ふる雪も、もと見し雪よいかいらぬ共、我は鶴氅^{かくしゆう}を着て
立て徘徊すべき袂^{たもと}も朽て袖せべき、細布衣、陸奥のけふの寒^{さむ}さをいかみ
せん、あらかもしろからずの雪の日やな、最明寺殿是こそば以前の女が
姉あらめと、なふく主のお方よいか、ごらんのごとく旅僧の身、お宿の
は無心アせしかど、主のおるすと有し故待もふけたるに歸り、前後をぼ
うする大雪今宵計のはじめぐみ、頼入とを仰けるげよ／＼やすきほ事な

がら見苦しき賤がふせや、何とてお宿とゆべきいや／＼旅と云三界の、
家を出たる世捨人草の筵も我爲の、玉の臺と有がたし是非よ一夜との
給へ共あれほらんぜ我よ夫婦兄弟さへ住居かねたる体なればどくめ
やさんやうもなし是より十八町あなたよ山本の里とすてよきとまり
のひへば暮ぬ間又一足も急がせ賜へと云捨て庵の内へぞ入みけるあ
ち曲もあやよしなき人を待つるよ浮世の人の情なきも我誤と返りみ
てあゆみ「つかる」計也妹の玉づき涙ぐみいたれしやは出家様最前お
宿と有りしかども姉の心いかゞと存外よたれせ置ませしかくおち
ぶれしも前世の因果責て出家よちぐらせべ經世様の武運もひらけ後
世の爲よもわるい事あされた様よも有まじとめてさへしんせま
せば別々馳走り入まといとわしや思ひますと云ければ、やさしやよふ
ぞ氣がついた是程の大雪よ遠くはよもやと表み出なふ／＼旅人お宿

参らせふなべ餘りの大雪より事も聞へぬよのいたにしの有様やなも
とふる雪よ道を忘れ今ふる雪よ行方を失ひ一つ所よたゞみて袖な
る雪を打拂ひくし給ふ氣色古歌の心よ似たるぞや駒とめて袖うち
拂ふ影もなしさのじわたりの雪の夕暮かやうよみしひ大和路や三
輪がさきなるさのじわたり是は東路のさのじわたりの雪の暮よ迷ひ
つかれ給へんより見苦しくいへど一夜泊り給へやなふ旅の僧旅の
お僧と招かれてそれ嬉しき心さしかりの浮世よかりの宿仮初ながら
ら值遇の縁一樹の影のやどりも此世ならぬ契也それは雨の木影是れ
雪の軒ふりてうき寝ながらの草枕是へどこそせうじけれいや是玉
づさせづかくお宿とすても供養いたさん物もなしお淋しからふがど
ふせふぞ姉幸粟のまゝさもしけれ共お慰とひつ取出せばそんな
物何のいの折節わるふ九献もなしお菓子がないかと夕霜の、おかな棚

をやさがすらん是ほ兩人、旅みしあればしゐのばよもるとかや栗の飯
とれ日本一の醍醐味御馳走よ預りたしとの給へばやれくそれにお
嬉しぃやせめてば何もされいよと萩の折箸かゝらけもよし有げ成もて
なしなり、耻しやふ僧様此栗どナ物古へ我夫世よ有し時うき歌よみ詩
よ作りたるをこそ承られ今い此あれをもつて命をつきさふらふぞや、
日ひよやろせいが見しゑいぐはの夢ゆめに五十年其かんたんのかり枕まくら一醉さう
の夢の覺さめしもあは飯いのしかしく程よどかし、あれやげよ我わともうちも寝て
夢ゆめよも昔むかしを見るならば慰なぐさむ事ことも有べきよなふほらんひへ住すうかれたり
古き郷ごの松風寒さむき夜よもすがらねられねば夢ゆめを見みず、何思おもひ出だの有べき
とそそろそろそよ、涙なみだをうかべける旅僧りょくそうも哀かなれよ催もよぶされ墨すみの袂たもとをしほらるむか
更行よけゆましよ夜寒よか 寒さまさりひへ渡わたる、何なんをか焼や火ひよ焼やてあて参さんらせん、や
思おもひ付つけたり我夫世わよ有あし時鉢じばくの木きよすき、數かず多たの木きをあつめ持もれ侍まつひ

しを、篋様のさまよふところへいはれぬひんの花すきと、皆人より參らせ
て今、漸く三本残て、あの雪を持たる梅櫻松、わきて夫の秘藏、なれ共、今宵
のもてなしよ是を焼火と立んとすれば、や、玄ばらくく、是の思ひも寄
ぬ事、ほ志の有難けれ共、重て世よ出給ひてのほ慰、無用よあして給られ
とよいや、く、とても此身の埋れ木の、いつのさかりよいつの花いつの
時をか待べきぞ、唯徒成鉢の木を、ほ身の爲よ焼ならば、是ぞ採蘿汲水の、
法の薪と、思しうせ、玄かも誠よ雪ふりて、仙人よつかへし雪山の薪、かく
こそあらめ我も身を、捨人の爲の鉢の木伐共よしや惜からじと、雪打拂
ひて見れば面白やいかよせん先冬木より咲初るほどの梅の北面、雪
報じて寒きよもと木より先さきたてば、梅を伐やそむべき、見しといふ
人こそ、うけれ山里の、おりかけ垣の梅をだよ情なしと惜みしよ今更新
よなすべしと、兼て思ひきや櫻を見れば春とよ、花少連れければ此木やむ

ぶるど心をつくしそだてしよ、今ハ我のみわびて住家櫻伐くべて、火櫻
みなすぞ悲しき、松のさしも實枝をため葉をすかして、からりあれと
うへ置し其かい今ハ嵐吹、松のもとより常盤^{ときは}よて薪となるハ梅櫻伐く
べて今ぞ^{みかき}垣守^{さりゑ}衛士の焼火^{たき}おため成よく寄て、あたり給へや、なをさ
りならぬほんせつ寒^{さむ}さを忘れはだへ彌生^{やよい}きさらぎの暖氣^{だんき}よあた
る梅櫻、花見る心地^じいどや、松^{まつ}しもいか成人のほ行末^{ゆき}、男主^{おとこ}の假名^{けな}あざな
れ何とかゆひぞ、自然の時のふ爲^{ため}よも、何か苦^{くる}しらひべき聞まほしと仰
ける^{シテ}、人がましやな、古へを名乘^{ゆり}もさすがふもてふせ、さりあがら此上
の何をかさのみつしむべき、是こそ佐野の源左衛門經世がなれる果、哀
れとほ覽^{らん}ひへや扱も過^はし建長四年、鎌倉ハ北條相模守時頼公のほさ
べき、夫の經世^の將軍のほ供して在京の其諸の事、經世が父我爲^しり舅^{じゆ}、
佐野の兵衛政經^ゆへもなく人されず、やみ討^うよ討^うれ給ひしを聞とひど

しく我夫へ取て返し下向の時一ぞくの説よよつて、鎌倉へも入られず
道より直に勘氣とて所領莊園召上られ、經世親子が累代の知行、一所
も残らず伯父源藤太經景又押領せられ生がひもなき此有様、親の敵も
大かたば推量よまがひなけれ共實否を糾し討ん爲折了他國又身をや
つし、跡ふりかくす雪の庵、雪は春よも消殘る夕べも玄らぬものゝふの、
身の上あはれみ給へやとさめへど、とこそ泣ゐたる實よそれへ聞及び
たる物語、何迎鎌倉よ上り其に沙汰ひいひざさればとよ夫婦もさは
存すれ共運のつきとて最明寺殿諸國修行よ出給ひ萬機をいろいろせ給
へねば天照神の岩戸よこもり、月日の光隠れし如く、理非の別れんやう
もなし、ざりながらかく落ぶれては侍へ共、取傳へたる梓弓八十梶、は
りつめてあれはらんへ、是よ武具一領、長刀一枚、又われよ馬をも一疋
つあひで持てし、經世常よやせしは、只今よてもあれ鎌倉よ大事有と

聞ば、此具足取て投掛さがけ、さびたり共長刀ながとかひこみ、やせたり共あの馬まよかけ鞍くら置てふいと乘の、女房めのわよ口くちとらせ、一番いちばんよ馳はせ參さんじ、は着到きそど、よつらなつて拵合ごうが戰始はじらべ、敵何万騎有あり、逆も一番いちばんよわつて入手しゆりゅう、立軍兵寄合よあわせ打合うちあわせ、ぶんどり高名譽たかめいよを顯あらわし、一方いちらを賣せしめやぶり君きみのあ馬まのまつさきかけ思おもふ敵てきの大將だいじょうとむんすと組ぐみでさしちがへ玄げんなんす身みの、口くちをしや此儘このまゝならべいたづらいたづら、きかんきかんよせまり志しなん命めい、なんばう無念むねんの事ことさふぞと、兄弟いりどりかつはと伏乞ふぎづみ泣なきくとこそ道理どうりなれ、旅僧りょくそうも至極しじきのとひとみ衣きぬの袖そでをぞしほらるしほらるし、よしや浮世うきよのうきしづみかくてはてじたゞ頼たのめ、我世がよの中なかよあらん限りかぎりのちかひを願ねがひ給たまへやど、詞ことを殘のこし殘のこる夜よも明方あけちかく隙ひましろく雪ゆきもおやめ、ばさらべ逆いそいとまゆと出給だましふ、かかる所ところへ佐野さのの源左衛門げんざゑもん經世けいせい、古鄉こきょうへ歸かる錦にしきの袖汗あせよひたゑてかけ戻もどり、ア女房めのわ、鎌倉かまくらよて敵源藤太とうふたよ出合しゆあわせ、首取くびとりて歸かりしぞ玉たまづよ諸よし共とも悦えべと

いきをひ切て呼はれべ、兄弟夢かと嬉しさのそぞろうき立お手柄く。
僧をどゞめて供養せし佛の方便神の力、共々悦び給はれと旅僧よかた
れべ重疊シテ重ねやうだう。何をかつしまん我こそ時頼入道最明寺道崇也、汝が慈悲
ふかきをかんじ天よりさづくる幸有、こよひ寒氣をしのぎし梅櫻松三
本のなさけよあふたる三ヶの莊、加賀よ梅田越中よ櫻井、上野よ松枝合
せて三ヶ、三莊を子よ孫よいたるまで相違なき條安堵こうなんのほ判、三人は
つとうれ志顔シテ、中よあを經世はぐく悦びのまゆをひらきつゝ、さのゝ舟べ
し取はなれし、本領よ安堵して、お供のしやうぞくはなやかよ、さくらさ
かえる北條氏、末代までもかうばしき、梅の花びら五代めの君が歸館を
松の色千秋、樂よぞ祝ひける

北條時頼記 終

明治廿四年十一月

日印刷

明治廿四年十一月

日出版

日本橋區通四丁目四番地

發翻行刻者兼

內藤加我

日本橋區新和泉町一番地

印刷者

瀧川三代太郎

日本橋區通四丁目四番地

發兌

金櫻堂